古今東西気楽ノ進め

おっと歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
古今東西気楽ノ進め

【Ｎコード】
Ｎ１９５２Ｎ

【作者名】
おっと歩

【あらすじ】
作者のユーモアセンスを基に書くシュール形コメディ。
この物語は茄茂泣町（なもなきちょう）で繰り広げられるのであった。！
１１月２８日ユニークアクセス１０００突破！

有限会社野丸のひととき

宇多(うだ)都梨(つり)　「ねえ、苑自君」
苑自(えんじ)　髪目(はつもく)「何ですか？　宇田部長」
宇多「もしかして、君、私のこと嫌ってない？」
苑自「もしかして、今日部長のコーヒー用の角砂糖を、すべて角パン粉に変えたことと、その質問は関係があるのですか？」
宇多　「そうだよ。最初気づかないで、コーヒーに入れたらびっくりしたよ、今も口の中がぼそぼそしてるよ。」
苑自　「これはあれですよ、子供のころに公園にいたありの巣穴を一日中凝視しているおじさんに、みんなでいたずらするのがはやってたんですよ。そのおじさんが、妙に部長に似ているんですよ。いわば、部長に対してそのいたずらを復刻して、楽しんでいるわけですよ。」
宇多　「理由がいまいち納得いかないけど、様は私のことを嫌ってはいないわけだね？」
苑自　「いえ、それとは別に部長のことは嫌いですよ。」
培句(ばいく)　啓栄(けいえい)「おい、何をやっているんだ。昼休みは1時で終わりだろ。」
苑自「培句社長まだ13時ですよ。」
培句「世間様では、それを1時とも言うんだよ。それはそうと、今日うちの会社に新入社員が見学に来ることになった。苑自髪目開発主任、宇多都梨営業部長、全社員を上げてわが社の案内をしようと思う。」
苑自「いきなり、正式名称で呼ぶようになりましたね。」
培句「なにしろ、この小説、今回が発掲載だから、キャラ紹介も兼ねなきゃいけないんだよ。」
宇多「どうして、そうやって世界観を崩壊させるようなことを、言うんですか？」

培句「こちらがその、新入社員です。」
新入社員Ａ「よろしくお願いします。」
苑自「作者の、名前を考える気力がなくなったようですね。」
宇多「なぜ、またそういうことを言う。」
培句「こちらが、営業１課です。」
ガチャッ
培句「あの、一番窓際のデスクでわれわれにすさまじい邪気を放っているのが、この会社が創立以来平社員をやっている平野（ひらの）さんです。」
新入社員Ａ「つまり、万年平ってことですか？」
プッ　ぐさっ
宇多「初めての人が平野さんの吹き矢をよけられるなんて運がいいですね。」
新入社員Ａ「あの、矢が当たった部分の壁が溶けているんですけど。」
苑自「アフリカのどっかの民族からもらってきた猛毒らしく、インド象も一撃の威力だそうですよ。」
培句「この会社に長年勤めているいわば『長老』的な存在ですので、彼に何でも聞いてください。」
新入社員Ａ「いえ、聞いたら命に危険がありそうなんですけど・・・」
培句「隣の給湯室に大概いるのが、ほぼお茶汲み担当の紅一点の佐藤（さとう）さんです。」
佐藤「社長、コーヒー用の角砂糖が、すべて角パン粉に変わっていたんですけど・・・」
宇多「お前、ここの角砂糖にも魔の手を？」
苑自「私は、やるときは徹底的にやる男なんです。」
培句「砂糖は、君の自腹で買いなおせよ。」
苑自「ちょっと、私がやったという証拠がどこにあるんですか？」
培句「今、自白したじゃないか。この向かいの部屋が、苑自開発主

任の研究室だ。おい、あけても大丈夫か？」
苑自「大丈夫ですよ。この前みたいに私のバッタの『与太郎』がクローン増殖して、部屋中に飛び交ってませんよ。」
ガチャッ　ギイィィィ
新入社員Ａ「研究所らしい部分は、何本かの試験管とコンピューターだけですね。」
苑自「道具箱は常に持ち歩いているんでね。」
新入社員Ａ「ひとつお聞きしてもよろしいですか？」
培句「なんだね？」
新入社員Ａ「この会社何を販売してるんですか？」
・・・・・
社員一同「君は聞いてはいけないことを聞いてしまった。」
その後この作者の気力によって名前も与えられなかった、新入社員を見たものはほとんどいなかった、いや、いたかもしれない、うん、やっぱりいた。

苑自主任の発明品会議（前書き）

前回に引き続き舞台は、有限会社野丸。
苑自主任が新たに発明したものを製品にすべく、安全性を確かめるため重役三人組で会議をすることとなった。

苑自主任の発明品会議

培句「では、これから会議を始めたいとおもいます。」
宇多・苑自「はーじーめーまーす。」
培句「前回の会議からはや一ヶ月、この一ヶ月間で発明したものを、苑自主任は出してください。」
苑自「前回の会議から一ヶ月間、特に意見・要望がでなかったため、適当に作りましたがよろしいですか？」
培句「適当ってお前、ある程度考えて作れよ。」
苑自「そんなこと言ったって、この会社のコンセプトが『人が幸せになるものをつくりましょう。』っていう曖昧なものだから、作りづらいんですよ。」
宇多「そうですよ、だから第1話で来た新入社員に例の質問されたとき、全員何も答えることもできず、思わせぶりな解説文まで入れて、結局何もなかったていうエンディングになったじゃないですか。」
培句「そんなこというなよ、曽祖父がこの会社を興して以来、このコンセプトでずっとやってきてたんだから。」
宇多「よくこんな曖昧コンセプトでここまでやって来れましたね、あれ？」
培句「どうした？」
宇多「じゃあ、この会社に創業以来勤めている平野さんって、いまいくつなんですか？」
培句「知らないよ、曽祖父の時代から勤めてたことは確かだけど、本人に聞いたら吹き矢向けられるんだよ。とりあえず、そろそろ会議始めるぞ。」
苑自「では、大1番の発明ですこのモニターをご覧ください。」
ウィーン
苑自「これは、『車のフロントガラスに装着すると、音声で後方の

状況をおしえてくれる機械です』デザインは、ふくろうをかたどっております。」
宇多「どうでもいいけど、何でお前の発明は、使用効果がそのまま名前になってるんだよ？」
苑自「こうしとけば、いちいち使用方法を説明しなくても済むじゃないですか。」
宇多「そのかわり、毎回そのいちいち長い名前を呼ぶことになるだろ。」
苑自「これは、フロントガラスの前に装着すると、音声で後方の状況を教えてくれるというものです。」
宇多「その説明必要なかったな。」
培句「なるほど、で、価格は？」
苑自「２０００円ほどです。」
培句「で、サイズは？」
苑自「そうですね、だいたい四方６０センチぐらいですね。」
培句「前見えねーじゃねーか、却下、どうしたらこんな失敗するんだよ？」
苑自「私は人に役立つものを作ると、なぜか失敗するんですよ。」
培句「次いけ、次」
苑自「続いては第２番の発明、これは、『携帯に装着して、歌を歌うとどれぐらいうまいかを、点数で判定してくれる機械』です。」
培句「これも、四方６０センチじゃないだろうな。」
苑自「これは、私の個人的な趣味で作ったものだから大丈夫ですよ。」
培句「で、どんなアーティストの歌が入ってるんだ？」
苑自「みぞれ、ＢＬＣ４９、林屋木久扇、栄川ひろし、伊藤四郎などですね。」
培句「ところどころ気になるが、まあいいしょう、採用」
こうして、苑自主任の開発した、『携帯に装着して、歌を歌うとどれぐらいうまいかを、点数で判定してくれる機械』は大ヒットした。

有限会社野丸は、ある天才発明家がときたま大ヒット商品を作り出すことで、成り立っているのであった。

苑自主任の発明品会議（後書き）

感想ぜひお願いします。作者が寂しがっているので・・・

実は培句社長には、弟がいたんです。（前書き）

苑自主任の発明した、『携帯に装着して、歌を歌うとどれぐらいうまいかを、点数で判定してくれる機械』の売り上げ調査のために、野丸の社員たちは培句社長の弟が経営しているデパートに、訪ねていった。

実は培句社長には、弟がいたんです。

苑自・宇多「こんにちはー。野丸のものです。」
培句（ばいく）　鎗栗（そうりつ）「これはどうも、ようこそいらっしゃいました。」
宇多「どうですか？わが社の製品の売り上げは」
鎗栗「ええ、とてもいいですよ。ただ・・・」
宇多「どうしました？」
鎗栗「総合的に見て、うちのデパートの売り上げが芳しくないんですよ。」
苑自「血は争えませんね」
宇多「それはまた、で、何か対策はしてるんですか？」
鎗栗「ええ、今、屋上でヒーローショーをやってるんですが、これもまた人気がなくて。」
宇多「どんなんですか？」
鎗栗「ちょうど、あと少しで次の会が始まるんでみんなで見に行きますか？」
宇多「ええ、ぜひ」
１５分後、ショーが終わって
宇多「苑自君。」
苑自「はい。」
宇多「これはひどいな」
苑自「ええ、お金取られなかったからまだしも、こんなものを見るために時間を使ったと思うと怒りがこみ上げてきますね。」
宇多「鎗栗さん、このショーの脚本誰が書いたんですか？」
鎗栗「わたしです。」
宇多「じゃあ、キャラクターのデザインも。」
鎗栗「ええ、自分でも見てて情けなくなってきました。」
宇多「苑自君、さすがにちょっとひどいから改善に協力しようよ。」
苑自「えー、いやですよ。めんどくさい」

宇多「そういうなよ、鎗栗さんがなみだ目じゃないか。とにかく主人公の動きが恐ろしく悪かったですね、あの中どんな人が入ってるんですか？」
鎗栗「ええと、確か『古来亭（こらいてい）　敬生（けいしょう）』って言う落語家さんですね。」
苑自「古来亭　敬生・・・？それってもしかして『古来亭（こらいてい）　知銘（ちめいしょう）』師匠の内弟子じゃありませんか？」
鎗栗「ええ、そうですよ。」
宇多「知銘生さんなら聞いたことがあります。確か大変な名人らしいですね。あれ、苑自君？」
スタスタスタッ
苑自「ねえ、敬生さん。」
古来亭　敬生「はっはい、何でしょう。」
苑自「もしかしてあなた、知銘生師匠とは親しいの？」
敬生「ええ、まあ」
苑自「じゃあ、君が言えば知銘生師匠のサインぐらいはもらえるの？」
敬生「ええ、おそらく。」
苑自「宇多さん。」
宇多「どうした？」
苑自「やりましょう。」
宇多「はっ？」
苑自「私たちでこの見てて、目が腐るほどだめなショーを変えましょう。」
かくして、苑自主任の私利私欲のために、駄目ヒーローショーの改良計画が始まった。次回へ続く。

実は培句社長には、弟がいたんです。（後書き）

ええ、この作品は生意気にも次回へつづきます。
落語家が出てきたのは、作者が大の落語好きだからです。
次回、苑自主任の大暴走による、ヒーローショーの改良計画が始まります。
感想お願いします。作者が寂しがるので・・・。

検証！もしだめな大人たちがヒーローショーの改良をしたら、（前書き）

前回のあらすじ。第3話を読むこと

検証！もしだめな大人たちがヒーローショーの改良をしたら、

宇多「では、これからショーの対策会議を始めようと思います。」
苑自・鎗栗「はーじーめーまーす。」
宇多「鎗栗さん、そういえばどうして、落語家の敬生さんがヒーローの中の人なんかやってるんですか？」
鎗栗「ええ、実は私と知銘生は、中学時代の同級生だったんです。この前、久々に電話がかかってきて『友達よしみで、敬生にいいアルバイトを紹介してくれ』っていうんですよ。ちょうど、ヒーローの中の人がいなかったんでやってもらってるんです。」
宇多「なるほど、まずとにかくこのショーの悪いところを指摘していくと、なぜか戦闘員が2人しかいないことですね。」
鎗栗「すいません、予算がなかったもので・・・・」
苑自「じゃあ、マドギワ族の連中に手伝ってもらいましょう。」
説明しよう、マドギワ族とは、平野がリーダーを務めているなぞの組織である、なぜか皆嫌に動きが機敏だが、目的がよくわからず、あまり近寄らないようにしているのである。実は第1話からいたのだが、全く気づかれてなかったのである。
苑自「平野さーん。」
平野「・・・・」
マドギワA「・・・・」
マドギワB「・・・・」
宇多「なんで、もうスタンバイできてるの？」
苑自「まあ、一応前の回からいましたからね、全く気づかれてませんでしたけど。」
そして、ステージに乗って
宇多「じゃあ、シーン3主人公が戦闘員を軽くいなすシーン、スタッ、あっこらマドギワB、主人公をはがいじめにするんじゃない、あっこら、マドギワA吹き矢を構えるな、平野さん何吹き矢渡して

るの。」
苑自「グダグダですね。」
宇多「これはまず、別のところから変えていったほうがいいな、まず敵の組織の名前を変えよう。」
鎗栗「組織の名前？」
宇多「そうですよ、何ですか敵の組織の名前が『二階から目薬』ってもうちょっと悪そうな名前考えられなかったんですか？苑自君なんか無い？」
苑自「岩淵伝内ってどうですか？」
宇多「個人名じゃねえーか、違うよ、もっとこう、何とか団とかそういうやつだよ。」
苑自「でも、私から言わせてもらうと、そんなことより、もっと派手な演出が必要だと思うんですよね。」
宇多「なるほど、1理あるな。」
苑自「だから、まずここにある花火を使って・・・」
鎗栗「ちょっと、これうちの商品！」
苑自「我慢しなさい、売り上げのためだ、そしてこのように後ろで爆発させるわけです。」
宇多「おい、室内で花火やるなよ。」
苑自「まだちょっと物足りないですね、じゃあこのクラッカーを・・・」
鎗栗「ちょっと、それもうちの商品！」
苑自「我慢しなさい、これもサイッ・・・売り上げのためだ。」
宇多「今ちょっと、本音出ちゃったね、おい、『サインのため』っていいそうになっちゃったね、おい。」
苑自「あとは、なぜか意味も無くにかわいらしい、ヒーローのデザインですね、何ですかこれ、こいつ戦うんですよね、何がモデルなんですか？」
鎗栗「すいません、ちょっと前ペットショップで見て感動した動物がいて・・・」

苑自「もう、こんなもの直しようがありませんよ。」
宇多「そんなことよりも・・」
苑自・鎗栗「えっ？」
宇多「鎗栗さん、あなたあの名人の「古来亭　知銘生」師匠の友達なんですよね？」
鎗栗「ええ、そうですよ。」
宇多「だったら、こんなショーやるよりも、知銘生師匠に友達のよしみで、独演会でもやってもらったほうが、お客さんが集まるんじゃないんですか？」
鎗栗「なるほど、その手がありましたね。」
こうして、「古来亭　知銘生」が呼ばれることにより、デパートの売り上げは格段に伸びた。苑自主任も無事、サインをもらうことに成功した。唯一不幸になったのは、敬生がまたアルバイトがなくなってしまったことであった。

検証！もしだめな大人たちがヒーローショーの改良をしたら、（後書き）

ヒーローショー編、後編が終わりました。
思ったより早く更新できて、よかったです。
そのうち、番外編で「もしも古今東西気楽ノ進めのメンバーが落語の〇〇だったら」というのもやる予定です。なので、なるべく落語を聴いていただけたらうれしいと思います。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・。

味というのは、十人十色（前書き）

舞台はおなじみ会議室。
マドギワ族の連中も含め、皆が深刻な表情で席に着いた。

味というのは、十人十色

培句「皆さん、そろいましたか？これからとても、重要な会議を始めます。これは、命にかかわる問題なので、即急に解決する必要があります。」
宇多・苑自「ええ。」
培句「皆さんもご存知のとおり、今も含め給湯室にはほぼ、お茶組担当の佐藤さんがいます。」
宇多。苑自「ええ。」
培句「これまた、皆さんご存知のとおり、彼女の入れるお茶はとても不味いです。これを、どうにかして、改良しようという話し合いをこれから始めたいと思います。」
宇多「確かにお茶に限らずコーヒーも不味いですけれどね。」
苑自「本当ですよ、この前研究室でよく考えずに飲んだら、なんかの薬液と間違えたかと思いましたよ。」
宇多「かと言って、飲まないで水分が蒸発したら、ものすごい異臭が発生するんですよ。でも、湯飲みの中を見ても、お茶っ葉しか入ってないんですよ」
培句「苑自主任、あのお茶をどうにかしておいしく飲める方法、たとえば薬とかはできないかね？」
苑自「前、分析してみたら確かに飲んでも害はないし、お茶っ葉も普通のものなんですよ。でも、どんな薬品でもあの味は消せませんね、もう舌の神経を麻痺させるぐらいしか方法が無いですね。」
宇多「以前、はっきり言ってみたらおそらく何かを変えたらしく、味は違ったんですけどさらにひどくなったことも、ありましたしね。」
培句「しかも、自分で絶対飲まないのに、大量に作るんだよ。」
苑自「もう、最終手段としたらあの味を好きになる以外ないですね。」

培句「どうしたものかね。」
ガチャッ
佐藤「会議お疲れ様でーす。お茶でもどうぞ。」
ガチャッ　バタンッ
培句「行ったか？」
宇多「行きました、うわさをすれば影って本当ですね。さてどうしますか？」
培句「苑自主任、さっき味を好きになる必要があるって行ったろ？おさきにどうぞ。」
苑自「冗談じゃありませんよ。宇田部長から飲んでくださいよ。」
培句「じゃあ、こうしよう、じゃんけんで負けたやつが、このお茶を全部飲もう。」
じゃんけんの結果　培句パー　宇多パー　苑自パー　平野パー　マドギワAパー　マドギワBグー
マドギワB「・・・・・・」
ゴクンッ・・・・バタッ
皆「マドギワBーーーーー」
培句「おい早く、救急車を」
宇多「でも、今月の鍵当番がマドギワBだからこいつしか会議室のキーロックの暗証番号わかりませんよ。この部屋には電話が無いし・・・。そうだ、誰か携帯電話は？」
苑自「私が携帯を持ってます、あっ充電が無い。」
培句「早く充電しろ、命にかかわる」
苑自「待ってください、これこのごろ接触が悪くて。」
宇多「しまった、ここは密室だ、このままだと水分が蒸発して、例の異臭が・・・」
１時間後、会議室にいたメンバーは病院に運ばれた。

味というのは、十人十色（後書き）

これは、落語の「茶の湯」という話をモチーフにかきました。（知ってる人いるかな？）感想お願いします。作者が寂しがるので・・・

馬鹿が風邪を引かないのでなく、馬鹿みたいなことをするから風邪を引く（前書

前回病院に運ばれた、野丸の社員たちは入院生活を送っていた。

馬鹿が風邪を引かないのでなく、馬鹿みたいなことをするから風邪を引く

宇多「偉い事になりましたね。」
苑自「本当ですね。」
培句「会社のほうは、佐藤さんが留守番しててくれてるから、一応心配は要らないけどね。」
宇多「あの人は、普通に仕事さえしてくれればかなりできる人なのに、何故かお茶汲みしかしてくれないんですよね、特に我々がいる間は。」
苑自「そういえば。」
培句「どうした？」
苑自「私、保険に入ってるんですけど、これって保険でおりるんですかね？」
培句「そうだな、今までこんなこと無かったから、保険会社も相当困ってるんだろうな。」
看護士A「みなさーん、回診のお時間でーす。」
5分後
培句「そういえば、看護士さん。」
看護士A「なんですか？」
培句「さっき、回診のときに若い先生の近くでうろうろしてた、年配の方がいましたよね？あの人、私が前この病院で健康診断受けたときも見かけたんですけど、相当長いですよね？かなり悪いんですか？」
看護士A「どの人ですか？」
培句「ほら、あの黒ぶち眼鏡の、口元に髭を生やしてた人ですよ。」
看護士A「ああ、あの人はうちの病院の先生ですよ。」
培句「えっ？」
看護士A「ですから、あの人はうちの病院の『松倉（まつくら）　崎緒（さきお）』先生ですよ。」

培句「でも私、あの先生に1度も病状とかを聞かれたことが無いんですけど。」
看護士A「ええ、松倉先生は一目見ただけで、患者さんの病状がわかってしまう名医なんですよ。もっとも、健康のためにあまり大きな声を出さないし、少食でやせてますからよく患者さんに間違われるんですけどね。今は若い人の教育のために、あまり自分で口を出さないようにしているので、わからないかもしれませんね。」
培句「じゃあ、あの先生が私のお見舞い品の、さきいかを持っていったのも何か意味があったんですか？」
看護士A「いえ、それはたださきいかがほしかったんだと思います。」
15分後
宇多「しかし、少しのど乾きましたね。」
苑自「そうですね。培句社長も一緒に自動販売機探しに行きませんか？」
培句「そうだな、ずっと寝てると腰が痛くなるしな。」
宇多「でも、この病院結構広いから、なかなか見つかりませんね。」
培句「誰かに聞こうにも、誰もいないな。」
苑自「ここになら、誰かいるんじゃないですか、ほら、『薬品研究室』」
ガチャッ
苑自「あれ、誰もいませんね。」
宇多「おい、あんまり入ってると怒られるぞ。」
苑自「誰もいないんだったら、空の試験管が今あまりなかったんで、何本かくすねていっちゃいましょう。」
培句「だから、やめなさいって。」
苑自「そんなにいうんだったら、もうちょっと予算出してくださいよ。」
病院スタッフB「こら、誰かいるのか？何をしてるんだ？」
苑自「マズイ、逃げろ。」

宇多「おいおい、逃げちゃだめだろ。」
ガラガッシャンガッシャンガッシャン
２０分後
病院スタッフＢ「はあ、やっと捕まえた。」
宇多「何で私たちまで逃げちゃったんでしょう。」
培句「突然、大声出されてびっくりしちゃったんじゃない？」
病院スタッフＢ「そういえば、あなたが逃げるとき、何か落っこちませんでした？」
苑自「確か２６番の札が貼ってあった試験管が割れましたね。」
病院スタッフＢ「２６番は確か、動物の繁殖作用を高める薬ですね、あの部屋に生き物は・・・あっしまった。」
宇多「どうしました？」
病院スタッフＢ「あの部屋には、新種の殺虫剤を作るための、ゴキブリがいたはずだ。」
宇多「とりあえず、薬品研究室に行って見ましょう。」
薬品研究室前　ガサガサガサッ
宇多「やばいですね」
皆「やばいですね。」
宇多「なかの状況を確かめたいんですけど、とてもじゃないけど入りたくないですね。」
苑自「この機械で、レントゲン写真が取れますよ。」
宇多「またお前勝手に。」
カシャッ
苑自「地獄絵図ですね。」
培句「おい、どうすんだよ。この大量のゴキブリ」
苑自「心配しないでください、ここに私が作った『噴霧してゴキブリを退治する機械』があります。ここに、平野さんの吹き矢の毒を入れれば、毒霧でゴキブリが退治できます。」
宇多「そういえば、平野さんもマドギワ族もいたんですね。」
苑自「マドギワＢは集中治療室ですけど、せりふが無いので全く気

づきませんでしたね。」
培句「とりあえず、誰かがこの中に入って、スイッチを押せばゴキブリを退治できるわけだな。じゃあ誰かいくかじゃんけんで決めよう。」
宇多「前回、じゃんけんで悲惨な結果になったのを覚えてないんですか？」
じゃんけんの結果
培句チョキ　宇多チョキ　苑自チョキ　平野チョキ　マドギワAチョキ　病院スタッフBパー
病院スタッフB「そういえば、何で私までじゃんけんに参加させられてるんですか？」
苑自「とにかく、あんたは負けたんだからおとなしく入りなさい。」
ガチャッ　ドンッ
病院スタッフB「うわーー」
培句「大丈夫かー？」
病院スタッフB「なんとか、スイッチは押せました」
苑自「じゃあ、早く脱出してください。自力で、」
５分後
宇多「おい、まだガサガサ聞こえるぞ。」
苑自「薬が効かなかったんでしょうかね？ちょっと中を見てみましょう。」
ガチャッ
宇多「おい、うかつに入るなって。うわーっ」
培句「逃げろー」
ガラガッシャンガッシャンガッシャン
宇多「おい、またなんか倒したぞ。あれ？」
培句「なんか、だんだんゴキブリが弱っていく？」
病院スタッフB「わかった、今、開発途中の殺虫剤の試験管を倒したからだ。」
培句「とにかく、事が収まってよかったな。」

病院スタッフB「ところで、今壊したものや、殺虫剤の弁償は誰がしてくれるんだ？」
皆「えっ？」
その後、佐藤さんの入れたお茶を殺虫剤として送ってみたら、意外と好評だった。

馬鹿が風邪を引かないのでなく、馬鹿みたいなことをするから風邪を引く（後書

ええ、今回も無事書き終わりました。今回は少し長めになった気がします。

感想お願いします。相変わらず、作者が寂しがるので・・・

大切なものを盗まれない様に金庫を買うと、逆に狙われる。（前書き）

前回入院した野丸の連中は、ようやく会社に戻ってきた。

大切なものを盗まれない様に金庫を買うと、逆に狙われる。

培句「ようやく、戻ってきたな。」
苑自「本当ですよ、あんまり長く入院してたらこんな会社つぶれますよ。」
佐藤「そういえば、皆さんどうして入院してたんですか？突然病院に運ばれちゃったんでよく分からなかったんですけど、お茶でも飲みながら聞かせてください。」
宇多「いや、今日はお茶はやめておこう。」
佐藤「そうですか、じゃあポットの中に入ってるんで、のどが渇いたら飲んでください。」
培句「それもともかく、うちの会社もだいぶ利益も上がってきたし、苑自主任の開発資料なども、たくさん会社においてあるだろ、当分の間、入院生活を送ってた連中も健康のために、残業はできないし、佐藤さんも残れない日もあるだろう。つまり、夜中に会社に残れない日も多くなると物騒だからいい機会だし、警備員を雇おうと思う。」
宇多「警備員って、そんな人雇うお金あるんですか？」
培句「うむ、格安のところが見つかってね、実はもう契約している。」
宇多「どんな人ですか？」
培句「ここに写真があるぞ、名前は『小森（こもり）　谷古宇（やこう）さんという人だ。』」
皆「どれどれ・・・」
宇多「あの、この人、気のせいか映画とかで見た夜中に血をすいに来るヨーロッパのモンスターに似てるんですけど・・・」
培句「そうだよ、おっしゃるとおりだよ。」
宇多「あの、この人雇って大丈夫ですか？」
培句「いや、何年か前になんかそういうのが専門の人たちと条約を

結んで、今は働いて病院から輸血パックを買ってそれを飲んで生きているらしいよ。」
苑自「時代は変わりましたね。」
培句「昼間は、今使ってない掃除用具入れの中で寝てて、夜になると出てきて警備をしてくれるらしいから、よろしく頼むよ。」
苑自「じゃあ、夜中だけ社内の鍵のシステムを変えておきますね、このままだと見回りしにくい部分もあるでしょうし。」
培句「ああ、よろしく頼む。」
その日、深夜
スティッド「アニキ、こんな会社狙ってもあんまり儲からないんじゃないか？」
マック「お前は、バカかよく考えろ、こういう儲かってなさそうな会社が意外と金をためてるんだ。実際、ここでは警備員を雇ったらしい、意外と儲かってるってことだ。」
スティッド「なるほど。」
マック「分かったら、はやく開けろボンクラ」
スティッド「ＯＫ、よし、意外と簡単に開いた。」
マック「おい、音に気をつけろよ、警備員がいるんだから。」
スティッド「アニキ、まずどこから行く？」
マック「やっぱり、社長室だろ、なんやかんやであそこが一番金がある。」
スティッド「ここが社長室のようだぜ、おお、ラッキー鍵が開いてる。」
マック「なんだ、金庫とかは無いな、まあともかくきたんだなんか金目のものはないか？」
スティッド「なんか、暗くてよくわからないけど、なんか落ちてたぜ。」
マック「ちょっと待て、今携帯の明かりで・・・おい、これクレジットカードだ。見た目は新しいからまだ、使われてなさそうだ。こいつは、儲けた。」

スティッド「じゃあ、早くずらかろうぜ。」
マック「ああ、そうだな。」
ガチャッ　バタンッ
マック「おい、なんか足音がしねえか？」
スティッド「もしかして、さっき言ってた警備員じゃねえか？」
マック「しまった、隠れるところが無い、うわ、あれ映画とかで見た夜中に血をすいに来るヨーロッパのモンスターじゃねえか？」
スティッド「アニキ、早く逃げよう、追いかけてきた。」
マック「ああ。」
小森「アッコラ、マチナサイ。」
ズデンッ
マック「おい、あいつ自分のマント踏んで転んだぞ。この隙に逃げろ。よし、玄関に着いた早く開けろ。」
スティッド「待ってくれ、入ったときは簡単に開いたのに今度はぜんぜん開かない・・・」
マック「おい、またきたぞ、逃げろアッまた転んだ。」
スティッド「アニキ、とりあえずこの部屋に隠れよう。」
マック「この部屋は、給湯室か？ちょうど、走ってのどが渇いたからお茶をもらおう。ご親切にもうポットに入ってる。」
スティッド「アニキ、おれにもくれ。」
ゴクンッ
スティッド「うえ、なんだこの味。（小声）」
マック「バカ、むせるなよ、音でばれるだろ、湯飲みも落とすなよ、形跡が残らないように全部飲めよ。（小声）」
スティッド「こんな部屋にいつまでもいてられない、違う部屋に行こう。（小声）」
マック「隣は開発室か？ここにも研究資料かなんかあるだろう。とりあえず、ここに場所を変えよう。」
ガチャッ　バタンッ
マック「おい、なんだか、いろいろあるけど、使い物になりそうに

無いな。とりあえず、早く脱出しよう。」
スティッド「ちょっと待ってくれ、今回もまた・・さっきの玄関の鍵といい、ここの科学者はよっぽどたちが悪いな。」
マック「（のぞき窓をのぞき）おい、さっきの警備員がきたぞ。」
スティッド「でも、あと２０秒で勝手に開いちまうぜ。」
マック「おい、今開いたら完全にばれるじゃねーか。」
スティッド「ここの、科学者は本当にたちが悪いな。」
ガチャッ
マック「おい、気づかれたぞ、ドアを押さえろ。ああ、もうだめだ。」
午前６時
小森「アア、モウアサダ、アサハニガテネ。」
マック「あれ、なんだか勝手に戻っていっていったぞ。」
スティッド「とりあえず、逃げようぜ。」
マック「ちゃんと、元通りにドアを閉めろよ。ところで、さっきのお茶の口直しに、喫茶店でも行かないか？美味いコーヒーの店を知ってるんだ。」
スティッド「でも、アニキ俺、今、財布持ってないぜ」
マック「俺も持ってないよ。でも、さっき、盗んだカードがあったろ、早くしないと、持ち主にばれて使えなくなっちまうぞ。」
マック「なるほど、ああ、朝日が目にしみるな。」
翌日
培句「よし、昨晩も何事も無かったようだな。」
苑自「あの、培句社長。」
培句「どうした？」
苑自「もしかして、社長室にカードとか落ちてませんでしたか？」
培句「なんだ？クレジットカードなくしたのか？」
苑自「いえ、おもちゃなんですけどね、おととい、買ったのが見つからなくて、家にも無いんですよ。今はおもちゃも精巧だから、ぱっと見には気づかないんですけど。」

培句「もしかしたら、昨日部屋を掃除したときに捨ててしまったかもしれないが・・・そんなものなんに使うんだ？」
苑自「いえね、例えば道端で偽者のカードを落とすでしょ、そしたらどっかのバカが何も知らずに使うけど、おもちゃだから使えなくて、ものすごく困るっていういたずらを考えたんですけど、まあいいです、そう高いものでもないし、またどっかで買います。」
培句「なんだよ、お前もいつまでもそんないたずらばっかりしてないで、もうちょっと役に立つことをしろよ、ほら今日の新聞のこの記事を見ろよ、こんな人みたいに、勇敢に悪人に立ち向かっていけるような人に・・・」
培句社長の見せた記事にはこう書いてあった、「喫茶店で二杯分のコーヒー代を払うためにおもちゃのクレジットカードをつかった二人組みの男を捕まえるため、逃げた犯人を追って、勇敢に立ち向かった喫茶店の店員が表彰された。」

大切なものを盗まれない様に金庫を買うと、逆に狙われる。（後書き）

ええ、無事書き終わりました。
このごろ、新キャラがたくさん出てきて全員に均等に愛情をふれるか心配になります。
感想おねがいします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

自分より明らかに実力が上の人に挑むのは、勇気ではなく無謀（前書き）

いつも平和なようで、なにかしら事件が起こる茄茂泣町、今回は少し穏やかでない事件が起こったようで・・・

自分より明らかに実力が上の人に挑むのは、勇気ではなく無謀

鶴野（つるの）　玉州（ぎょくしゅう）「俺の名前は鶴野、詐欺師である。近頃少し名前が知られてきた。ちなみにこれは、心の声であって誰かに説明しているわけではない、ということをいっておく。さて、今回のターゲットは・・・」

プルルルルッ

苑自「はい、こちら株式会社野丸、苑自主任です。」

鶴野「あっ、オレです。オレッ」

苑自「あいにく、オレという知り合いはいませんな。」

鶴野「くそっ、なかなか引っかからないな、しかしここで引き下がっては・・・（心の声）いやですねー、忘れちゃったんですか？声でわかるでしょ？」

苑自「声・・・？まさかお前２０年前に実家から家出した、弟の髪造じゃ無いか？」

鶴野「しめた、うまく引っかかった。（心の声）そうだよ、髪造だよ。」

苑自「お前、２０年前に家出して、家の金持ち出してから、全く連絡も無く、父さんと母さんはお前はもう息子じゃない、っていってたけど兄ちゃんはお前の味方だからな。」

鶴野「なんか、意外と複雑な事情があったよ。（心の声）ところで、兄ちゃん。」

苑自「今この町にいるのか？だったら、明日時間空いてるか？明日の１１時ごろ、茄茂泣第２広場でどうだ。」

鶴野「うん、わかったよ。」

苑自「いいか、絶対来いよ。もし、来なかったら、兄ちゃんは今科学者やってるから、今の電話を元に地獄のそこまで追いかけて、お前を見つけ出すからな。じゃあな。」

ガチャッ　プーップーップー

鶴野「切れちゃったよ、まあいいや、金に困ってるか何か言っていくらか頂くことにしよう」

宇多「なあ、苑自君。」

苑自「どうしましたか？」

宇多「今、横で聞いてたけど、お前そんな複雑な事情があったのか？」

苑自「いいえ、第１私１人っ子ですよ。」

宇多「えっ？」

苑自「だから、今のは口からでまかせですよ。なんか、詐欺師の類だと感じたんで、口からでまかせにいったんですよ。じゃあ、明日の１１時ごろ、外出しますんで・・・」

宇多「こういうことらしいですけど、いいんですか社長？」

培句「別にいいよ。」

宇多「えっ？」

培句「あいつは、たまにそういうイタズラをさせないと、発明の回転が悪いんだよ。」

翌日１１時

苑自「よお、待ったか？」

鶴野「２０分ぐらい、まったよ。（心の声）いえ、全然。」

苑自「そういえば、兄ちゃん、お前が昔好きだったお菓子買っといたぞ。ほら、『酢梅』」

鶴野「うげっ、オレこれ大嫌いなんだよ。（心の声）あっ、ありがとう頂くよ。」

苑自「そうそう、兄ちゃんちょっと寄るところあるんだけど、いいか？」

鶴野「ああ、いいよ。」

１５分後

苑自「すいませーん。おまわりさーん。」

鶴野「何でよりによって交番なんだーー？（心の声）」
智理（ちり）　隼人（はやと）「これは苑自さん、本官に何か用でありますか？」
苑自「いやね、落し物しちゃってね、おもちゃのクレジットカードなんだけど・・届いてない？」
鶴野「こいつ、いい年して何落としてるの？（心の声）」
智理「いえ、届いてませんね。」
苑自「じゃあ、届いたら連絡してもらえます？」
智理「はい、わかりました。」
苑自「それじゃあ、お願いします。」
智理「それでは・・・ああ行っちゃった、そういえば苑自さんの近くにいた人、どっかで見たような・・・」

苑自「そういえば、もう昼食べたか？食べてなかったらおごるぞ。」
鶴野「ああ、いただくよ。でもいいの、こんな高そうな料亭？」
苑自「ああ、気にするな。上着かけるから貸しな。」
２０分後
苑自「なかなか、美味かったな。兄ちゃんは急用を思い出したから行くけど、財布ここにおいて置くからな、これで払っていいぞ。」
鶴野「ああ、やっと得できたよ。（心の声）うん、わかったよ。」
苑自「じゃあな、ちょっと女将さーん。今、私と一緒にいた男いただろ、財布おいとくからよろしく。」
１０分後
鶴野「さて、そろそろ会計するか。女将さーん。」
女将Ａ「はーい。」
鶴野「確か、この財布の中に・・・あれ、紙が一枚だけ入ってる、なになに・・・『よく考えたら私に弟はいなかった』？なんだこれ、しょうがない、自分の財布が上着に合ったはず・・・あれ、無い、まさか落とした・・いや、そんなはずない、料亭に入る前は確かにあったから・・・しまった、上着かけたときに、財布もってかれた。やられた、騙された。」

女将Ａ「どうしました、お客様失礼ですけどまさかお金が・・・無いのなら警察を呼ぶことになりますが。」
鶴野「ちょっと、待ってください、突然警察って・・・」
女将Ａ「いえ、前に喫茶店でおもちゃのクレジットカードでの支払い事件があったでしょ、そのため店でそのように取り決められまして・・・なにかあったら、すぐに警察を呼ぶことになったんです。」
５分後
智理「本官、到着いたしました。あれ、あなたさっき苑自さんと一緒にいた人で・・・アッよく見たらあんた、詐欺で手配されてる鶴野じゃないか。」
鶴野「しまった、気づかれた。」
智理「分かったぞ、また新しいターゲットを見つけて、そいつに食事代を払わせようとして、失敗したんだな？」
鶴野「いや、あながち間違ってはいないけど・・・」
智理「とりあえず、詳しい話は署で聞こう。」
鶴野「ちょっ、ちょっと待って・・・」
３０分後
苑自「あの、すいませーん。」
刑事Ｂ「はい、どうしました？」
苑自「あれ、いつもの刑事さんは？」
刑事Ｂ「いえ、私は留守番なんですけど、智理さんは今、本署のほうに出かけてますよ。それで、用件は？」
苑自「いえね、財布を見つけたんだけど、これが結構中身が入ってるんだよ・・・」
刑事Ｂ「うわ、すごいですね、じゃあこの書類に必要事項を書いてください。」
苑自「はい、分かりました。」
刑事Ｂ「しかし、あなたも正直な人ですね、拾っちゃえばネコババできるのに・・・。そうそう、さっき智理さんが外出したって言いましたよね、実は智理さんが詐欺師を捕まえたんですよ、こいつが

タチの悪いやつなんですよ、このせちがらい世の中にあなたみたいな人が増えればいいんですけれどね。」
苑自「でも、落とし主が現れなければ、全額もらえるんですよね？」
刑事Ｂ「ええ、でもこんな大金が中身ですから、現れると思いますよ。」
苑自「なあに、世の中はうまくできたもんですよ・・・。」
かくして、鶴野は逮捕された。取調室では事実を話したが、全く信用されなかった。
数日後、鶴野の差し入れに大量の酢梅が送られてきた。

自分より明らかに実力が上の人に挑むのは、勇気ではなく無謀（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
今回のモチーフは落語の「鰻の幇間」と「粗忽大名」です。
感想お願いします。相変わらず、作者が寂しがるので・・・

人間はエネルギーを消費する事をしたがる生き物である。（前書き）

さて、クイズの時間です。犬も好まないのに、人間が頻繁にするものはなんでしょう？答えは本文で・・・

人間はエネルギーを消費する事をしたがる生き物である。

妻A「あんた、なんでこんなものを買ったの？　」
夫B「しょうがないだろ、もう買っちゃったんだから」

妻A「だからって、この苦しいときに、ゴルフクラブなんか買うこと無いでしょ。」
夫B「あのな、これは今、手に入れられなかったらいつ手に入るか分からないんだぞ。」
妻A「だったら、もっと残業でもしてきてよ。」
夫B「なんだと。」
妻A「なにさ、こんなもの。」
がっしゃーん
夫B「お前、なんて事を。」
がっしゃーん　パリーン
１５分後　ピンポーン
夫B「誰か客が来たな、一時休戦だ。」
妻A「ええ、はーい。」
苑自「どうも、こんばんは」
妻A「これは苑自さん、どうしましたかこんな時間に?」
苑自「いえ、うちの会社で新しくでる商品の、宣伝も兼ねたおすそわけです。」
妻A「これは、わざわざすいません。」
苑自「どうぞ『おこわカレー』です。意外といけますよ。」
妻A「まあ、中に入ってお茶でも・・・」
夫B「おい、ちょっと。」
妻A「ちょっと、すいません。どうしたの?」
夫B「だって、今は部屋に人を入れるのはまずいだろ、さっきの夫婦喧嘩の・・・・（小声）」

妻Ａ「そんなこといっても、あの人もう靴脱いでたのよ。（小声）」
夫Ｂ「あの人に、ああいうこと知られるとロクなことが無いだろ。（小声）」
妻Ａ「でも、あんまり待たせてると、怪しまれるわよ・・・（小声）
ああ、苑自さんどうぞ。」
苑自「はい、そうそうそういえば。」
夫Ｂ「どうしましたか？」
苑自「私がこの町内中に仕掛けている『夫婦喧嘩を探知して、音声で私のメインコンピュータに知らせる機械』が、さっきこの近くで作動したんです。なにか心当たりはありませんか？」
夫Ｂ「ギクッ　いえ、ありませんね。」
苑自「そうですか、私の趣味はそういう夫婦喧嘩をビデオに録って、ネットにのせることなんですが・・・」
夫Ｂ「よかったよ、まだばれてなくて（心の声）」
苑自「あれ？」
夫Ｂ「どうしました？」
苑自「なんで、居間で食器が割れてるんですか？」
夫Ｂ「いや、それは・・・」
苑自「そういえば、さっきこのうちの入る前になんか大声で叫んでたのが聞こえたんですけど。」
夫Ｂ「いや、これはあれですよ。南国の地方の部族の『フダベボ族』の雨乞いの儀式ですよ。」
苑自「フダベボ族？・・・　ああ、そういえば前ネットに載ってました。」
夫Ｂ「本当にいるのかよ、フダベボ族（心の声）」
苑自「でも、これだったら『聖なるヤギの紋章をかたどったタペストリー』と『特定の池にしか生えない幻のコケ』が足りないんじゃないですか？」
妻Ａ「ええ、今ネットで頼もうとしてたんです、ほら。」
苑自「あっ本当だ。でもいいんですか、このサイト使って。」

妻A「えっ？」
苑自「だって、このサイト間違って注文しても取り消せないんですよ。それじゃあ、もう遅いんで失礼します。」

一週間後、この夫婦のもとに、注文したものたちが届いた。
その後、この家族は変な部族の儀式には待っているという、うわさが町内中に流れた。

人間はエネルギーを消費する事をしたがる生き物である。（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします。相変わらず作者が寂しがるので・・・

結婚はする前の日が、一番幸せだったりする。（前書き）

毎度おなじみ、有限会社野丸。
今日の話は珍しく佐藤さんが主演です

結婚はする前の日が、一番幸せだったりする。

培句「えっ、お見合い？」
佐藤「ええ、両親が突然いけなくなって、親戚一同誰も都合がつかないんですよ、ですから普段お世話になっている、社長がご同行されて下さったらありがたいんですけど・・・」
培句「それは、構わないけど私でいいのかね？」
佐藤「ええ、社長がいて下さったら百人力です。

培句「と、いうわけで私は明日外出することになりました。
苑自「えー、ずるいですよ。社長だけ遊びに行って。」
宇多「別に遊びに行くわけじゃないだろ。」
苑自「でも、われわれ社員に過酷な労働を強いて、社長だけずるいじゃないですか。」
宇多「お前、さっきまでペットのバッタとたわむれてたじゃねーか。」
培句「分かったよ、お前は明日仕事しなくてもいいから、今まで迷惑かけた人達に謝ってきなさい。」
苑自「えーっ。」
培句「嫌なら、仕事しろ。」
苑自「分かりましたよ。行きますよ。ちなみに、どこでお見合いやるんですか？」
培句「教えたら絶対来るから、絶対教えない。心配だから宇田君もついていきなさい。」
宇多「分かりました。でも懐かしいですねお見合いなんて。」
培句「そうか、宇田君はお見合い結婚だったな。そういえば、苑自君は、どういう馴れ初めがあったんだっけ。」
苑自「そうですね、あれは確か・・・」
7年前

苑自「やれやれ、また大量に没もらっちゃった、培句社長にいくら言っても会社のコンセプト変わらないから、作りづらいんだよな・・・悪いね平野さん手伝ってらっちゃって。」
平野「・・・・・・」
ボトッ
苑自「ああ、また落としちゃった。そうだ、この『飲んだ瞬間、全く嘘がつけなくなって思ってることをべらべらしゃべりだす薬。』をミネラルウォーターのペットボトルの中に、溶かしちゃおう。ちょうどここに蛇口が・・・よし、空きビンにこれを入れて。少し手が空いた。あっちょっと待ってください。トイレに行ってくるんで、荷物見ててください。」
平野「・・・・・・」
配達員A「全く、ペットボトルの箱に突然穴が開くなんてついてないな、あっ、こんなところまで。あの、このペットボトル転がってきたやつですか？」
平野「・・・・・・」
配達員A「なんだ、何も言わない、変な人だな。じゃあ、もらっていきますよ。」
配達員B「おーい、早くしろ。」
配達員A「はーい。」
苑自「ああ、すいませんね。平野さんお待たせして、じゃあ行きますか。これ捨てに行くところ、結構遠いから。」
ゴトッ
苑自「あっ、『見た目はミサイルだけど、当たっても爆発とかはせず吸盤のように吸い付いて、露骨に痛い機械』が、落ちてスイッチが入った。」
通行人C「誰かー、助けてください。ひったくりがー。」
苑自「えっ。」
ひったくり「はあはあ。」
キューン　ズボッ

ひったくり「うわ、なんだこれ。吸い付いてきた。せっ背骨が、ギブギブ。」
通行人C「あの、今ひったくりに吸い付いてるのは、あなたのですか？」
苑自「ええ。」
通行人C「よかったら、今度お食事でも？」

宇多「それが、馴れ初め？」
苑自「ええ、特に断る理由もなかったし、いい人だったんで、これをきっかけに。」
宇多・培句「ふーん。」
余談　7年前
配達員B「どうも、到着しました。」
職員D「ああ、よかった。記者会見に間に合って。」

報道陣E「輪追先生、今回の不明予算問題に対して、どのように思われますか？」
輪追（わおい）　署黒（しょくろ）「ええ、今回の問題に関しては、いまだに我々も調査中です。しかし、我々は常に国民の皆さんのことを考え・・・」
ゴクンッ
輪追「・・・・・」
報道陣E「先生？」
輪追「まったく、いつまでこんなくだらない事を、続けるんだおい？あの予算は俺が愛人と旅行に行くために使ったんだよ。」
報道陣E「じゃあ、今回の問題の原因は先生ということですか？」
輪追「ああ、そうだよ。まったくなんでマスコミも、俺達にずっと張り付いておいて気づかないかね？そうそう、5年前の賄賂にも気づいてないしな、本当に警察も馬鹿だよな。ベラベラ・・・」
こうして、輪追は逮捕された。

結婚はする前の日が、一番幸せだったりする。（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
この話は後編に続きます。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

本人より立会人のほうが、緊張することがある。（前書き）

前回のあらすじ
前話をよむこと。

本人より立会人のほうが、緊張することがある。

培句「それじゃあ、行ってきます。」
宇多・苑自「はい、いってらっしゃい。」
バタンッ
宇多「それじゃあ、私たちも行くか。」
苑自「ええ。」
一時間後　茄茂泣料亭
佐藤「社長大丈夫ですか？手が震えてますよ。」
培句「えっええ・・・・・・・・」ガクガク

宇多「ええと、次はこの料亭だな。」
苑自「ええ、以前の詐欺師事件で、迷惑をかけましたから。」

培句「すいません、ちょっとトイレに・・・。」ガクガク
佐藤「大丈夫ですか？もう6回目ですよ。」

苑自「あれ、今の培句社長じゃないですか？」
宇多「あっ本当だ、こっちに気づかなかったみたいだな。ああ、そうか佐藤さんのお見合いここでやってるのか。」
苑自「ちょっと、見に行きませんか？」
宇多「そうだな、リストに書いてある分は終わったからな。」
苑自「あっ、この部屋みたいですよ。」
宇多「やっぱり、まだかがむと腰が痛いな。」
苑自「なんか、あったんですか？」
宇多「ああ、この前の日曜日にちょっと・・・でも、ちょっと見えないな。」
苑自「じゃあ、昨日使った、円形のこぎりで・・・」
宇多「おい、だめだろ、壁に穴あけちゃ。」

苑自「だいじょうぶですよ。今は『壊す前と見分けがつかないぐらいに、完璧に直す接着剤』がありますから。」
ゴリゴリ
宇多「社長、かなり緊張してるな、今、湯のみ落としたぞ。」
苑自「本当ですね、あのまま失禁するんじゃないですか？」
宇多「あ、相手側も来た。」
ガラッ
苑自「あれ、相手側の立会人、鎗栗さんじゃないですか？」
宇多「あ、本当だ。あっちもかなり緊張してるな。」
苑自「兄弟ってこういうところまで、似るんですね。でも、おかしいですね。何でお互いに無反応なんでしょうか？まさか、緊張しすぎて気づいてないんじゃ・・・」
宇多「いくらなんでもそれはないだろ。きっと、社長が相手側に連絡とかしたときに気づいたんだよ。」
培句「はっははじめまして。。。。。。佐藤　しょうこの立会人の、培句　啓栄です。」
鎗栗「ははははははじめまして、、、、培句　鎗栗です。培句さんは、いいお名前ですね。」
苑自「本当に緊張しすぎて、気づいてないみたいですよ。」
宇多「本当にこんなことってあるんだな。鎗栗さんすごい汗だぞ。」
培句「そそそそそ鎗栗さんのご趣味は何ですか？」
宇多「あんたたちのお見合いじゃないだろ。」
鎗栗「ええ、いいいい家でカブトムシを、料理することです。」
宇多「鎗栗さんも、言ってる事めちゃくちゃだな。オイ」
培句「どどどどうですか二人で、庭を散歩しませんか。」
鎗栗「けけけけ結構ですね、参りましょう。」
苑自「行っちゃいましたね。」
宇多「どうすんだ、この縁談。」
苑自「とりあえず、あの役立たずの立会人2人を探しましょう。」
宇多「いや、探すまでもなく、2人で手をつないで池に落ちてるよ。

」
苑自「ちょうどいいですね、じゃあこれを池の中に・・・」
宇多「お前、それはまさか。」
苑自「そうですよ、『佐藤茶』ですよ。昨日、佐藤さんがいれたのを水筒に入れて持ってきたんですよ。もしものために。」
宇多「どんなもしもの場合だよ。でも、そんなことしたら2人の命が・・・」
苑自「大丈夫ですよ、気付け薬になるぐらいにしますから。」
ドボドボ
培句「ブハッ」
苑自「あっ、気がついた。」
培句「なんか、頭痛いけどお前ら何をした？」
苑自「実の兄弟と手をつないで、池に落ちてる人に言われたくないですよ。」
培句「あれ、そういえば何で鎗栗がいるんだ。」
鎗栗「いや、あの男は私の部下なんですよ。」
培句「そういえば、縁談はどうなった？」
苑自「ものすごく気まずくなって、一言も話してませんよ。」
宇多「本当ですよ、男のほうお茶ばっかり飲んでますよ。」
培句「あれ？」
宇多「どうしました？」
培句「確かあの部屋にあったのは、お茶を入れるポッドと湯飲みだけのはずだ。私たちは緊張しすぎてそんな余裕はなかったから、まさか彼が飲んでるのは・・・」
宇多「ええ、間違いありませんね。」
皆「佐藤茶だ。」
苑自「あの、鼻につんと来るにおい間違いありませんね。」
宇多「でも、また相手も緊張しすぎて味が分からないんじゃ。」
培句「いや、目つきがちゃんとしてるから、それはないだろ。」
宇多「まさか、あのお茶を素で飲める人がいたなんて。」

苑自「でっ、これからどうします？」
鎗栗「とりあえず、２人に任せて帰るとしましょう。」
翌日
佐藤「社長、何で昨日途中でいなくなったんですか？」
培句「いや、色々あって・・・でっ、どうなった縁談は？」
佐藤「ええ、もうすこし私にあう人がどこかにいると思って、お断りしました。」
「それはないだろ」
全員が思った。

本人より立会人のほうが、緊張することがある。（後書き）

ええ、無事書き終わりました。
久々の鎗栗の登場でした。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

宇多部長、日曜の昼下がり（前書き）

サラリーマンのオアシス日曜日、宇多部長にとっても例外ではないようで…

宇多部長、日曜の昼下がり

宇多「今日は日曜日。嫁さんは買い物、息子は部活動、絵に描いたような自由な日曜日だ。まあ、ゆっくりテレビでも見てから昼寝して、その後本屋に立ち読みでもしにいこう。（心の声）」

ピッ

宇多「さすが日曜日だ。ゴルフ中継がやってる。そういえば、この頃ゴルフ行ってないな。（心の声）」

グキッ

宇多「しまった、いい年してゴルフの真似なんかするんじゃなかった、腰を痛めた（心の声）。そうだ、確か携帯電話がテーブルの上に…（心の声）。」

5分後

宇多「まったく、歩ければ4・5歩の距離なのに、匍匐前進で行くとこんなに疲れるとは…ああ、これだ。（心の声）」

充電してください。

宇多「チクショーー。なんでこんなときに、限って充電が切れてるんだよ。カメラとかつける前にこっちを何とかしろよ。ああ、もうこれで助けも呼べやしない。痛すぎて昼寝もできやしない。このパターンは嫁さんと息子が帰ってきたときにちょうど腰が治るパターンだ。こうなったら意地でもこの状態で、休日を楽しんでやる。さっそくテレビでも見よう。（心の声）」

ピッ

宇多「ゴルフ中継がやってる、今はこんなもの見たくない、お前のせいだ。このヘタクソ。次は、バラエティーだ、なんだこれ一回みたな、ああ再放送か。次、ニュースか、これもまた、いつもと同じようなニュースしかやってないな。なんだ全然見るものがない。録画した番組でも見たいが、やり方が分からん。いつも息子にやってもらってたからな、あれ、こうか？こうかな？あっ、できた。腰痛

めるのも、まんざら悪いことでもないな。この年でひとつ成長できた。でも、嫁さんの韓国ドラマしか入ってないな。しかし今のテレビは凄いな。他にはどんな機能が…（心の声）」

こうして、宇多部長は日曜日をテレビの新しい機能を探すことに費やした。

宇多部長、日曜の昼下がり（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

please んっ brake（前書き）

悪事を働いたものが入れられる、茄茂泣刑務所。果たしてその実態は。

please んっ brake

輪追「私は、４０３の輪追です。あなたは？」
鶴野「私は鶴野といいます。」
輪追「鶴野さんは何で捕まったんですか？」
鶴野「詐欺をやりまして。」
輪追「詐欺の相手に気づかれたんですね。騙そうとした私がすっかり騙されまして、相手がお金払わないで料亭から帰ったんです。おまけに財布もすられて・・・そこから足がつきまして。あの時財布をすったのが騙そうとした相手だと私は気づいたんですが、道連れにしようと思ったけど、失敗です。私のやったのが詐欺だったのが悪かったですね。まったく、証言が信用されませんでした。」
輪追「ひどいことになりましたね、どんなやつです。相手は」
鶴野「確か科学者をやってるって言ってましたね。輪追さんは何で捕まったんです？」
輪追「賄賂です。7年間ずっと入ってるんです。」
鶴野「賄賂で7年間ってずいぶん長いですね。」
輪追「まあ、他にも色々やりましたしね、しかし、なぜかあの日になぜか完璧にやってのけたはずの悪事を全部ベラベラ話しちゃったんです。一番いけなかったのが、あれを言ったことでしたね。」
鶴野「あれって何です？」
輪追「警視総監と面識があったんですけど、彼がかつらだって言っちゃったんですよ。最初、私が錯乱状態だったことにするつもりだったらしいですけど、そうすると私の賄賂の自白も嘘になっちゃうんで、泣く泣く警視総監がかつらだったということを全国にばらして私を逮捕したんです。おかげで、警視総監がすっかり怒って、私を一生出さないって言ってました。全く、参りました。そうそう、４０４の部屋のひったくりさんも私と同じ日に逮捕されたんですよ

ね。」
ひったくり「ああ、あの時おかしな機械で腰をやられて今でも痛いんだよ。毎週木曜日になると、痛み出すからカレンダーがなくても、曜日が分かるんだ。」
マック「ちなみに、今日は何曜日ですか？」
鶴野「あなたは？」
スティッド「私たちは双子の空き巣の４０１号室の、スティッドとマック兄さんです。」
鶴野「あなた達は、空き巣先で見つかったんですか？」
スティッド「いえ、盗んだクレジットカードが偽者でそれでつかまったんです。」
鶴野「盗んだやつ使っちゃったんですか？」
マック「ええ。」
鶴野「あの。」
輪追「どうしました？」
鶴野「なんか、こころくなつかまり方してる人がいないんですけど・・・」
輪追「ええ、なんか落ちこぼれの犯罪者達が集まるとこらしいですよ。」
鶴野「えっ。」

please んっ brake（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
実はこの話、後編にも続きます。ここに載ってる犯人は、何話に出てきたか探してみてください。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

please んっ brake2（前書き）

前回に引き続き、舞台は茄茂泣刑務所。今回は、刑務所での生活をご紹介しましょう。今は、朝食の時間です。

please んっ brake2

鶴野「なんと言うことだろうか、一時は指名手配犯にまでなった詐欺師が、落ちこぼれ組みに入れられてたとは、実は結構ショックだった。（心の声）」
輪追「あの、鶴野さん？」
鶴野「へっ？」
輪追「ああ、よかった。やっと、返事しくれた。」
鶴野「ああ、すいません。気づきませんでした。」
輪追「いえ、いいんですけど。ずいぶん長く返事してくれなかったんで。」
鶴野「長いって言われても・・・あれっ？」
ひったくり「あいててて。」
鶴野「ひったくりさん、ずいぶん腰が痛そうですね。」
ひったくり「そりゃ痛いさ、何せ今日が木曜日だから。」
鶴野「ああ、そうですか・・・　待てよここに入ったのが月曜日だから・・・3日間も意識がなかったのか。そんなにショックだったか（心の声）」
マック「鶴野さん、ずっと話しかけても返事もしなかったし、食事中も作業中も元気がなかったんですけど、大丈夫ですか？」
鶴野「ええ、大丈夫です。　意識ないまま、動いてたのか？（心の声）」
スティッド「あっ、運ばれてきた。うわっ。」
鶴野「やっぱり、刑務所で食べるものだから、不味いんだろうな。うどんか、見た目は普通だな。（心の声）」
ズズー
鶴野「おやっ」
輪追「どうしました？」
鶴野「このうどん、よく味わって食べたら、茹で具合が最高で絶品

じゃないですか。」
マック「私たちも、最初はそう思いましたよ。」
鶴野「えっ？」
スティッド「でもそれは、最初の何日かの話ですよ。シェフのレパートリーが少ないから４ヶ月に一回しか、メニューが変わらないんですよ。ああ、なんか違うものが食べたい。」
鶴野「なるほど、こういう感じで来るのか。」
輪追「あっ、そろそろ作業の時間ですよ。」
鶴野「ああ、そうか。仕事もあるのか。」
１５分後
鶴野「あの。」
輪追「なんですか？」
鶴野「これいったい、何を作ってるんですか？」
輪追「えっと、今日は『コルクに刺さって抜けなくなった栓抜きを、抜く道具』ですね。」
鶴野「これ、買う人いるんですか？」
輪追「さあ、でも結構売れてるらしいですよ。そうそう、今日は慰問会があるんですよ。」
鶴野「なにがあるんですか？」
輪追「確か、古来亭　啓称っていう落語家さんが来るらしいですよ。」
３０分後
古来亭　啓称「本日は、まいどお足をお運び、御礼申し上げます。ええ、私も運がない様で全く売れることもなく、せっかく決まったデパートのヒーローショーのアルバイトも、親父の独演会に取って代わられ・・・」
その晩、４０１から４０４号室までの者は、自分たちのほうが運がないという話で盛り上がった。鶴野に大量に送られてきた酢梅をしゃぶりながら。果たして、彼らにつかまる理由に、かかわりがあったことに気づくときはあるのだろうか。

please んっ brake2（後書き）

ええ、今回も無事に書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

飛行機にはじめて乗る年齢は、年々下がる。（前書き）

茄茂泣町にもある、交通機関の飛行機。
果たして茄茂泣空港行きの飛行機で、どんな事件が・・・

飛行機にはじめて乗る年齢は、年々下がる。

野鳥（やちょう）　不雷（ふらい）「今日か、決行の日は・・・」
実はこの男ハイジャック、茄茂泣空港行きの飛行機をハイジャックしようとしていた。
野鳥「さて、そろそろ出発するか・・・あれ？」
１０分後
空港警備員Ａ「では、置き引きされたスーツケースは、どんな柄でしたか？」
野鳥「くそっ、何で爆弾が入ったスーツケースを置き引きされるんだよ。もう、しょうがないからリュックに入ってる偽者を使って、パニックになってる隙に乗っ取ろう。（心の声）」
空港警備員Ａ「まあ、見つかる可能性は低いですけど、気を落とさないでください。」
野鳥「そんなこといって、気を落とさないわけないだろ。もういいや、なんか食べよう。（心の声）すいません、これください。」
１５分後
野鳥「なんか、高い割に微妙だったな。すいません、お会計お願いします。」
レジＢ「えーと、お会計は～円です。」
野鳥「えーと、あれ？あっ、しまった。昨日、大家さんに家賃払ってから、おろしてなかった。」
レジＢ「すいません、お金が足りないのｊでしたらこちらへ・・・。」
空港警備員Ａ「また、あなたですか？」
野鳥「ええ。」
空港警備員Ａ「じゃあ、ここに必要事項を書いてください。」
野鳥「はい・・・。」

野鳥「なんか今日は散々な日だな、しかし飛行機をのっとっちまえばこんな事ともおさらばだ。（心の声）」
ＮＭＮ航空１０３便茄茂泣空港行きまもなく出発いたします。
野鳥「さて、出発だ。これから、一世一代の大仕事だ。」
キャビンアテンダントＣ「ええ、これから救命胴衣の取り扱いのご説明をさせていただきます。」
野鳥「よく聞いておいたほうがいいぞ、これから絶対必要になるんだから。（心の声）」
キャビンアテンダントＣ「新聞、週刊誌等はいかがですか？パズル雑誌もございます。」
野鳥「まだ、仕事をするには早いな、少し時間をつぶすか。パズルでもやろう。」
２時間半後
野鳥「結構、難しいなこれ。ああ、やっと終わった。あっ、しまった。もうこんな時間か。早く仕事に移らないと。」
ガクガク
野鳥「ああ、ずっと座ってたから、かなり足がしびれてる。おい、騒ぐな。この飛行機は俺がのっとった。騒ぐと、この爆弾を爆発させるぞ。」
シーン
野鳥「おや、ハイジャックが出たにしては騒がれない。少し騒いだやつもいたが、すぐ収まった。（心の声）」
キャビンアテンダントＣ「いやー、すごいですね。」
野鳥「えっ。」
キャビンアテンダントＣ「皆さん、この方は本日の本年度エイプリルフール大会の、優勝者です。いやー、この爆弾もまたリアルですね。」
野鳥「いやっ、ちょっと。」
キャビンアテンダントＣ「それでは、この方に大きな拍手を。」

パチパチパチ
野鳥「俺は、今日の計画のために、綿密なプランを立ててきた、新聞もテレビもろくに見なかったし、この飛行機のチケットも、かなり前のとったもので日付なんか覚えていない。だから気づく訳なかったんだ、今日が４月１日だなんて。しかし、今回の大会で優勝したおかげで、いくらか賞金も手に入るようだ。まあ、この賞金があればさっきの食事代も払えるし、当分楽に暮らして行けるから、ハイジャックの必要もなくなりそうだ。この部屋で、賞金などがもらえるらしい。（心の声）」
空港警備員Ａ「また、あなたですか？」
野鳥「ええ。」

飛行機にはじめて乗る年齢は、年々下がる。（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
次回久々に野丸のメンバー登場予定です。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

されども、運賃は年々上がる。（前書き）

久々に登場の野丸のメンバー、今日は茄茂泣空港から出張です。

されども、運賃は年々上がる。

宇多「しかし、今回の契約先は粋なところですね。」
培句「本当だな。社員全員分の出張費まで出してくれて、おまけにもうただ契約するだけなのに、観光するための、お小遣いまでくれるんだもんな。あれ？」
苑自「どうしました？」
培句「いや、なんか空港がいやに騒がしいと思って。」
苑自「ああ、あれはこの空港会社が主催している『エイプリルフールコンテスト』ですね。今はおそらく準備中なんでしょう。」
宇多「やけに詳しいな。」
苑自「当たり前ですよ。こういうイタズラ関係は、私の得意分野ですよ。」
宇多「まさか、お前なんかもってきたんじゃないだろうな？」
苑自「いえ、ここまで堂々とイタズラ出来ると、なんだかやる気が失せるですよ。」
培句「くだらないこといってないで、とっととといくぞ。」
宇多・苑自「はーい。」
佐藤「しかし、なんでこの頃の搭乗手続きは、こんなに時間がかかるんでしょうね。」
宇多「近頃は、テロ対策とかがありますから。」
佐藤「あっ、でも生泣空港行きの搭乗口はすいてますよ。」
宇多「本当だな。運がいいな。」
培句「とっとと済ませるぞ。」
ビーッビーッ
宇多「平野さん、なんか金属的なものもって来ましたか？「」
平野「・・・・・。」
宇多「それですよ、その吹き矢ですよ。なにもそんな武器としか言いようの無いようなもの、持って来なくてもいいじゃないですか。

空港に喧嘩売ってるんですか？マドギワＡもその刃物駄目ですよ。マドギワＢも、その妙な薬品捨てなさい。ほら、手離して。」
２０分後
宇多「はあはあ。なかなか離さない。えっ、何ですか？空港で預かってもらえるんですか？どうも、すいません。ほら、よくお礼言って。」
佐藤「なるほど、こういう事があるから混むんですね。軽く３０人は待ってますよ。」
培句「いや、こんな例は、まれだと思うが・・・」
佐藤「あっ、見てください。飛行機が着陸しますよ。ああ、下がってきた、下がってきた。」
苑自「本当だ、まるでうちの会社の業績みたいだ。」
培句「『お前の給料の様』にもしてやろうか？」
宇多「まあまあ、２人とも喧嘩しないで、土産物屋でも見て回りましょうよ。」
佐藤「えーと、何がありますかね。『まみ君・めもちゃんストラップ』・『ものすごく喉が乾くキャンディー』・『５０円で送れないポストカード』大していいものもありませんね。」
宇多「あっ、そろそろ時間ですから乗りましょうか。」
かくして、野丸の一行は飛行機に乗り込んだ。飛行機の中での一部始終は後半に続く。

されども、運賃は年々上がる。（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
生泣町のほかにも、波泣町（なみなきちょう）・舐泣町（なめなきちょう）と、言う町があります。ナムナキチョウはありません。４つの町は、姉妹都市で隣接しあっています。共同キャラクターで、まみ君・めもちゃんがいます。感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

金属検査では、カツラも引っかかるので要注意（前書き）

前回に引き続き、野丸のメンバーの出張。果たして飛行機で起こる騒動やいかに・・・

金属検査では、カツラも引っかかるので要注意

機内アナウンス「まもなく、生泣空港行きＮＡＭ便離陸いたします。」
シュゴーーー
宇多「ああ、とうとう離陸しましたよ。」
苑自「ええと、今日の名人会は『古来亭　充生（じゅうしょう）』の『長屋の花火』か・・・」
培句「しかしなあ、時代は進んだなあ。昔はこんな飛行機になるなんて夢たいな話だったのに・・・」
苑自「あっはっはは。」
培句「びっくりしたなあ、突然笑うなよ。」
苑自「だって今、花火職人八っつあんが長屋で火事を起こしてパニックになる一番面白いところですよ。」
培句「知らねえよ。」
機内アナウンス「これから、救命胴衣の使い方の説明を・・・」
苑自「あれっ、落語が中断しちゃった。よしっ。」
カタカタ
副機長「機長、何者かに機内のシステムがのっとられました。」
機長「なんだって？」
副機長「機長が残尿でトイレに長くこもっている間に、機内アナウンスが停止し、全チャンネルが名人会のチャンネルにされました。」
機長「今すぐ、復旧するんだ。」
宇多「おい、何やってんだ。早くやめろ。」
苑自「ちょっと待ってくださいよ。」
宇多「早くしろって。」
ポカッ
苑自「何するんですかいきなり、あれっ？」
宇多「どうした？」

苑自「なんか変なとこ押して、動かなくなっちゃいました。」
培句「どうなるんだ？」
苑自「落ちることはないでしょうけど、動き方がたまにえらいことになります。まあ、私の作ったプログラムですから、いいとこチャンネルを正常に戻すのでせいいっぱいでしょうね。」
１０分後
機長「全く、ところどころ操縦がきかなくなるな。またトイレだよ。」
副機長「機長、またですか？」
機長「全く年はとりたくないな・・・」
ガクンッ
機長「あー、痛っ。また揺れだしたよ。あれっ、しまったはまって出られなくなった。とりあえず、なんかにつかまって・・・」
カチッ　シュゴーーー
機長「しまった、スイッチ押しちゃった。すっ吸われる。」

苑自「部長、大丈夫ですか？」
宇多「酔った・・・」
培句「そういえば宇多君は、昔から乗り物に酔いやすかったな。」
苑自「部長、本当にまずくなったら、これつかってください。」
培句「おい、これ私のカバンだろ。吐けってか？これに吐けってか？」
苑自「じゃあ、生泣町の『からぶき屋根の家を、濡れぶきするプログラム』連れて行ってあげますから。」
培句「いらねえよ、そんなの。こっちに専用の袋あるだろ。」
宇多「うっ。」
しばらくお待ちください。
宇多「だいぶ楽になりました。」
培句「そうか、それはよかった。」
宇多「じゃあ、この袋トイレに捨ててきます。」

機長「たっ助けてくれ。」
宇多「あれっ、中に誰かいるんですか？」
機長「便器にはまって出られなくなたんです。」
宇多「そんなこといっても、鍵を開けてくれないと助けられませんよ。」
機長「そうなんだが、届かないんだ。」
宇多「ちょっと待ってください、苑自君。」
苑自「どうしました？」
宇多「実は、かくかくしかじか。」
苑自「でも、工具も何もないと手が出せませんよ。」
機長「それだったら、操縦室に色々ありますよ。」
苑自「そうですか。」

苑自「失礼します。」
副機長「なんだあんた？ハイジャックか？」
苑自「いや、お宅の機長が頻尿でトイレに閉じ込められたんですよ。」
副機長「そうですか、だんだん仕事を一緒にやるごとに、あの人に尊敬がもてなくなりますよ。」
苑自「全くですね、上司なんて尊敬するもんじゃありませんよ。」
副機長「あなたは、話が分かる人だ。全く飛行機のシステムものっとられるし、いいこともないですよ。」
苑自「ああ、これなら。こうしてこうして・・・」
副機長「あなたは天才だ。」
その後、苑自主任は表彰された。世の中とはなんと理不尽なものなのだろう。

金属検査では、カツラも引っかかるので要注意（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
この後、苑自主任と副機長は仲良くなりました。後、「長屋の花火」という落語は本当はありません、似たタイトルのものはありますが・・・
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

変な動きをしてはいけない理由は、怪我をしたとき説明するのが恥ずかしいから

前回の、飛行機出張から無事帰ってきた野丸のメンバー。しかし、彼らにトラブルが起こるのに、旅行先も普段の日常も関係ないわけで・・・

変な動きをしてはいけない理由は、怪我をしたとき説明するのが恥ずかしいから

培句「じゃあ、2人とも仕事のことは忘れて養生するんだぞ。」
バタンッ
苑自「いやー、えらいことになりましたね。」
宇多「あのな、元はといえばお前が始めた・・・あのほら、なんとか族の・・・」
苑自「フダベボ族ですか？」
宇多「そうだよ、その部族の雨乞いの儀式をお前が試して、変なダンスでお前が腕をひねって、あまりの雨量に屋根が落ちてきて私が頭を5針縫う大怪我をしたんだぞ。」
苑自「まあ、細かいことはいいじゃないですか。」
宇多「細かくないし、よくないよ。」
苑自「でも、今回は前回と違って確実に保険はおりますよ。」
宇多「そうだよな、前は保険会社に前例の資料がなくて、裁判になりかけたからな。」
苑自「しかし、入院ていうのは暇ですね。」
宇多「だからって言って、あんまりうろうろできないぞ。前回のことがあるんだから。」
苑自「しかし退屈ですね。あっ、そうだ社長お見舞いに何を持ってきてくれたんだろう。」
ベリベリ
苑自「うわー、これか。」
宇多「なんだった？」
苑自「あれですよ、『ものすごくのどが渇くキャンディー』」
宇多「あーそれか。前に、スーパーで安売りしてたやつ。」
苑自「まあいいや。暇つぶしになるから、舐めましょうよ。」
宇多「しかし、これはものすごくのどが渇くな。なんか飲むものないか？」

苑自「これどうぞ。」
ゴクンッ
宇多「うえっ、これまさか。」
苑自「そうですよ、まさかの佐藤園の佐藤茶ですよ。」
宇多「なんで、こんなもののませたんだよ？」
苑自「だって、『なんか飲むものないか？』って聞かれてこれを差し出したら、勝手に飲んだんじゃないですか。」
宇多「あっ、まずい。なんだかおなか痛くなってきた。トイレ行ってくる。」
苑自「そうですか？じゃあ、部長が行くなら仕方がないですから、私もお供しますよ。」
宇多「野郎、このために・・・（心の声）」
5分後
宇多「あー、全くなんてこったよ。」
苑自「じゃあ、病室の外、出たついでに売店でも・・・」
宇多「いかないよ。」
苑自「ちっ（心の声）」
病院スタッフB「あー、あんたらいつぞやの。」
苑自「あー、あなたは前回私たちがこの病院が来たときに登場したが、作者の気力のなさにより名前を与えられなかった病院スタッフB――。」
病院スタッフB「黙れ、あの時大量発生したゴキブリがいまだに残っていて、こっちは大変なんだぞ。あのときのうらみ思い知れ。」
宇多「やばい、逃げろ。うわっ、追いつかれる。」
苑自「ならば、コレを食らえ。」
バシャッ
病院スタッフB「なんかお茶のにおいがする劇薬らしきものが、顔にかかった。しまった目が見えない。」
宇多「このへやに隠れろ。」
バタンッ

宇多「これからどうする？」
苑自「そうですね、佐藤茶の効き目も長くは持ちませんしね。」
宇多「なんだか、暗くてよく見えないけど衣類らしきものがあるな。」
苑自「じゃあ、コレを着て変装しましょう。」
宇多「なんだこれ、ボウシとマスクか？」
苑自「じゃあ、この『口に当てて、ダイヤルを合わせるだけで声を変えられる機械』をマスクに仕込んでください。」
バタンッ
看護婦D「あっ、松倉先生こんなところにいた。もう、手術の時間ですよ。早く準備してください。」
苑自・宇多「へっ？」
5分後、手術室
看護婦D「患者は・・・才、男、容態は・・・で、・・・・・」
宇多「ちんぷんかんぷんだ・・・　しかし、適当に着たあの服が手術着だったなんて・・・（心の声）」
苑自「じゃあ、・・・方で・・・処置を行う必要があるな。（松倉ボイス）」
看護婦D「はい。」
苑自「じゃあ、ちょっとこの助手君とちょっと2人で、話し合いたいので皆は退室してもらますか？」
皆「はい。」
バタンッ
宇多「お前、さっきのペラペラと難しいこと言ってたやつどうしたんだ？」
苑自「私、医師免許の仮免を持ってるんですよ。」
宇多「医師免許に仮免なんてあったか？まあ、いいや。じゃあ、早く手術しちゃってくれ。」
苑自「それは無理です。」
宇多「へっ？」

苑自「わたし、知識はあるけど、技術はないんでです。だから、仮免なんです。」
宇多「じゃあ、こっから脱出しなきゃな。こっから、出れる場所は・・・そうだ、屋根裏だ。」
ガタンッ　ガサガサ
宇多「うわっ。」
苑自「どうしました？」
宇多「屋根裏に大量のゴキブリが・・・」
苑自「この部屋に、スチーム消毒機か何かありますか？」
宇多「あるけど、何に使うんだ？」
苑自「こいつのスチームを、屋根裏に流し込むんですよ。」
宇多「ああ、それか。」
ベチャッ
宇多「うわーーー。」
苑自「何、あわててるんですか？佐藤茶が患者の切開された部分に、こぼれただけじゃないですか。」
宇多「それが十分、まずいんだよ。早くふかないと、患者の命が・・・」
苑自「分かりましたよ、あれ？」
宇多「何やってるんだよ？」
苑自「いや、見てください。佐藤茶がかかったら、病巣が縮み始めたんですよ。」
宇多「ウイルスが死んじゃったんだな。あれ、コレってもしかして治ったんじゃないか？」
苑自「そうですね。おーい、皆。」
看護婦D「あの、大手術をたった2人で、しかもこんな短時間で終わらせたんですか？」
苑自「後の処置は頼んだよ（松倉ボイス）」
数日後
患者E「先生、ありがとうございました。」

松倉「いえいえ。　わたしこの人の手術したっけ？（心の声）」
患者E「それはそうと、私、なんだかおなかが痛いんですよ。」
松倉「ああ、今まで重病で食欲がなくて、病気が治って急に食欲が出てきて、食べ過ぎてしまったと、こういうわけですか？」
患者E「いえ、そういうのと違ってなんだか体に違和感があるんですよ。」
松倉「でも、検査では何も異常は見つかってませんけどね・・・」
おそらく、どんな名医でもこの原因は分からないだろう。

変な動きをしてはいけない理由は、怪我をしたとき説明するのが恥ずかしいから

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

古今東西白雪姫（前書き）

あの、おとぎ話の名作白雪姫。しかし、どうもこの小説のメンバーが出演すると、どうもまともにならないようで・・・

古今東西白雪姫

王女「鏡よ、鏡世界で一番美しい人はだれ？」
鏡「ひとえに美しさと、申しましても万人の方が汚物の様に嫌っていても、それを美しいと思う人がいれば、そこに美しさは生まれる訳で・・・」
王女「マドギワ科の誰か、この前、鏡に魔法をかけさせた魔法使いを呼んできなさい。」
数分後
魔法使いエンジ「おまたせしました。モグモグ」
王女「ああ、やっと来ましたか魔法使い。ずいぶん遅かったですね。」
エンジ「すいません、お宅の家来さんの馬で一緒に来たもんで・・・モグモグ」
王女「何で馬で？魔法で来ればいいでしょ？しかも、あの馬1人のりですよ。」
エンジ「移動系の魔法は疲れるんですよ。モグモグ」
王女「それにしても、馬を使って来たにしては遅かったですね。」
エンジ「すいません、途中でパン買ってました。」
王女「さっきから食べてるのそれかあああ。何、人待たせてパン買ってるの？後、パン粉をポロポロこぼすなあああ。」
エンジ「だって、あそこの店の焼きたては、なかなか買えないんですよ。モグモグ」
王女「だから、何でわざわざ買うの？魔法で出せばいいでしょ？」
エンジ「自分が稼いだお金で買うから、美味しいんでしょうがー（怒）」
王女「言ってることは正しいけど、今使うべきじゃないよ。なぜ、そんな怒る？」
エンジ「ゲフッ。それで何のようですか？」

王女「あっ、食べ終わった。（心の声）いえね、なんだか鏡の言うことが難しすぎるのよ。」
エンジ「だって、適切な判断ができる様に、賢くしてくれって言ったじゃないですか。」
王女「だけど、少し過ぎるからもう少し馬鹿にしてよ。」
エンジ「わかりました、スケラザガコヤケオアー。」
ボンッ
エンジ「これで、今日の夜に魔法がかかり終わります。」
王女「わかったわ。」
その夜
王女「鏡よ、鏡世界で一番美しい人はだれ？」
鏡「あなたは、おそらく自分といわせたいんでしょうけど、世の中そんな甘いもんじゃありませんよ。例えば、この近くの鏡松山に住んでる、佐藤さんの娘さんのほうがあなたより若いし、お綺麗ですよ。後、あなたは最近小じわが増えましたね。それから、・・・・」
ガシャン　パリンッ
翌朝
エンジ「朝から、何の用ですか？モグモグ」
王女「だから、パン粉をこぼすなって。いや、鏡を昨日割ったらずっとうめき声が止まらないの。」
エンジ「そりゃあ、意志を持つ鏡ですから、痛みも感じますよ。」
王女「昨日の晩、うめき声で眠れなかったのよ。何とかしてちょうだい。」
エンジ「でも、こんなに粉々になったら、手も出せませんよ。何でこんなになったんですか？」
王女「実は、かくかくしかじか。」
エンジ「なるほど、鏡に一番言われたくないことを的確に言われたと。それで、もう５０過ぎの大人がわれを失って、自分の小じわに対する不満を鏡にぶつけたんですか？でも、小じわは増えましたよね。」

王女「やかましいわ。若いころは、男たちを連れ歩いてまるで女帝の様と、言われてたのよ。」
エンジ「まあ、過ぎ去ったときのことは、どうとでも言えますよ。」
王女「あんたの言葉は、ところどころ腹立つね。」
エンジ「じゃあ、もう帰っていいですか？」
王女「ちょっと待った、じゃあ私をこんな目に合わせた鏡松山の佐藤に復讐してやるわ。あんたの力で」
エンジ「私じゃなくても、こういうのがプロの人に頼めばいいじゃないですか。」
王女「でもね・・・このごろ税務署がうるさくてね。予算の使い方を詳しく聞かれるのよ。」
エンジ「じゃあ、お宅で働いてる家来の方を使えばいいじゃないですか。」
王女「でもね・・・支持率がこのごろ支持率が低下してるからね・・・。なんか、こっちで堂々と説明できないような動きをするとマスコミがうるさいのよ。あんただったら、絶対ばれないし、予算も『魔法使い支払金』で予算がすんなり申告できるから便利なのよ。」
エンジ「分かりましたよ。こっちのほうははずんでくださいよ。でも、私が加害者になるのは、プライドに傷がつくので実行するのはあなたですよ。わたしは、手段を考えるだけですよ。」
王女「分かったわ。」
エンジ「これ、どうですか？」
王女「なにこれ？」
エンジ「特殊な、エネルギーを詰め込んだボールです。落とすぐらいの力で、目的の建物のみ確実に吹き飛ばします。」
王女「ちょっと見せて。」
エンジ「いいですよ。どうぞ。」
王女「熱っ。」
ゴトッ　ドカンッ
エンジ「言い忘れましたけど、エネルギーは強力なのでボールの温

度も７００度ぐらいあるんですよ。」
王女「それ先に言いなさいよ、城が半壊したじゃないの。後、何であんたは熱くないの？」
エンジ「わたしは、いざの時のために常に体にバリアを張ってるんですよ。」
王女「だからあんただけ無傷なの？ほかになんかないの？」
エンジ「これ、どうですか？」
王女「これは、お茶葉に魔法をかけたものです。成分は普通のお茶と変わらないんですけど、体に異常が現れます。」
王女「ちょっと実験してみていい？」
エンジ「私で試さないでくださいよ。」
１０分後
王女「マドギワかのかた、お勤めご苦労様。お茶でもどうぞ。」
マドギワＡ「・・・・・」
ゴクンッ　バタッ
エンジ「１４時５６分、人事不省。」
王女「あの、屈強に鍛えられたマドギワＡが、たった一口のお茶で・・・これいい、コレで作った抹茶アイスでもやつに届ければ・・・」
エンジ「てきめんでしょうね。」
王女「ありがとう、助かったわ。」
エンジ「報酬のほうは、いつもの口座にお願いしますよ。」
翌日　鏡松山
王女「すいませーん、宅急便です。」
佐藤「はーい。」
王女「ここに、判お願いします。」
佐藤「はい、どうも。」
王女「しめしめ、これで・・・（心の声）」
佐藤「なにかしら？あっ、抹茶アイスだ。どれ、ちょっと食べてみましょう。あっ、コレ美味しい。」
王女「馬鹿な、あの抹茶アイスを食べて普通でいられるだと？（心

の声）
あっ、一個箱の中に落ちてた。」
パクッ　バタンッ
佐藤「宅急便の人ー。ちょっと誰かー。」
隣国の王子「どうしました？」
佐藤「あなたは？」
隣国の王子「私は通りがかりの隣国の王子ですよ。」
佐藤「宅急便の人が突然倒れたんです。」
隣国の王子「どれどれ、うむコレは人工呼吸がいるな。じゃあ、わたしが・・・
うわ、年増だ（心の声）
やっぱり、こういうのはプロに頼んだほうが・・・」
佐藤「そうですね。」
王女は薄れ行く意識の中で、今度は魔法使いに若返らせてもらうことを考えたのであった。

古今東西白雪姫（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

師走の沙汰も雪次第（前書き）

だんだん寒くなりました。
野丸のメンバーは、会議室に集まっていた。

師走の沙汰も雪次第

培句「なあ、今１２月だよな。」
苑自「ええ。」
培句「１２月といえば、師匠も走るほど忙しいって言われる『師走』だよな。」
宇多「おっしゃるとおりです。」
培句「じゃあ、何でうちの会社はこんなに暇なんだよおおおお？」
苑自「仕事がないからじゃないですか？」
培句「その仕事がないわけを聞いてるんだよおおお。コレじゃ年越せないぞ。」
苑自「そんなに慌てなくても、成るようになりますよ。」
培句「いいわけねえだろおおおお。」
佐藤「社長ずいぶん気がたってますね。（小声）」
宇多「この会社がつぶれると親戚に相当いやみを言われるらしいぞ。それに、社長はここがつぶれると後がないから。（小声）」
培句「おい、苑自主任なんかないか？」
苑自「あったら、もうだしてますよ。」
佐藤「でも、前も社長がこうなったときに研究室の奥探したら、『見た目がストーブみたいなアイロンもかけられる加湿器』があったじゃないですか。」
苑自「ああ、あれすごく重くて売れないかと思ったけど、重いもので思いが伝わるっていうわけの分からんブームが起きて、すごく売れたんだよな。」
培句「そうだ、コラ3流科学者行って来い」
苑自「では、3流科学者、3流経営者の命（めい）を受け行って参ります。」
宇多「コラコラコラ」
１時間後
苑自「ただいまーー」

培句「じゃあ、早速見せてもらおうか。」
苑自「じゃあ、まずこちらのベルトをご覧ください。」
培句「なにこれ？」
苑自「これは、『装着してスイッチを押すと自分にかかる引力を消滅させることができるベルト』です。」
培句「何に使うんだ？」
苑自「つまり、コレを使うと浮き上がることができるんです。」
培句「何でこんな便利なもの早くださなかったんだよ？」
苑自「これ、オンとオフが極端で、失敗すると他の星に引っ張られる可能性があるんです。」
培句「じゃあ、使えないのか？」
苑自「いえ、屋根のある部屋で使えば大丈夫ですけど、衝突したらかなり痛いです。」
培句「却下、ほかになんかないのか？」
苑自「コレはどうですか？」
培句「なんだそれ？」
苑自「これは、『スイッチひとつで自動的に雪だるまを作る機械』です。」
宇多「珍しいな、お前がこんなもの作るなんて。」
苑自「いえ、娘の冬休みの自由研究に出したんですけど、なぜか私が作ったってばれたんです。」
宇多「お前のうちの娘、幼稚園児だったよな。」
苑自「ええ。」
宇多「幼稚園児が溶接された機械を、自由研究に持ってくるか？」
苑自「いまどきの子供なら、溶接ぐらいできるでしょう。」
宇多「できねえよ。」
培句「とりあえず、実験してみるか。」
苑自「ええ、じゃあ皆さん外に出てください。」
玄関
佐藤「あれ、雪だるまを作るのに、水とか氷はいらないんですか？」

苑自「そこが、この装置のすごいところで、材料を事前に準備しなくても、空気中の水分に信号を送り・・・　あっ、動き出した。」
ピコピコピ　ズドンッ
宇多「なっなんだ？」
苑自「空気中の水分を固めて、雷とほぼ同じ理屈で落ちてくるんです。」
宇多「そういう、危なっかしいことは、早く言えよ。落ちた衝撃で雪だるま粉々になったぞ。」
苑自「ええ、だから使うのやめたんです。」
培句「でも、これだったら人工降雪機として、使えるんじゃないか？」
苑自「いえ、それも無理です。」
培句「なんで？」
苑自「説明してて、思い出したんですけど、この雪ものすごい量の静電気を帯電してるんです。触ったら感電します。」
培句「どうすんだよ、玄関の前、雪まみれになったぞ。」
苑自「まあ、雪が解けて流れるまで外に出られませんね。まあ、仕事もないことですし、研究室の中の器具を使えば、この雪で久々に電気ストーブが動かせますね。」
培句「年が越せねえええ。」
１時間後　ストーブ前
佐藤「社長、やっと泣き止ましたね。」
苑自「５０過ぎのおっさんが泣くの、始めて見ましたね。」
宇多「挙句の果てに、泣き疲れて寝るって、あの人の行動サイクルはどうなってんだ？」
プルルルルッ
宇多「あっ、電話だ。誰か出て。」
佐藤「寒いので、行きたくないです。」
苑自「右に同じ、どうせまたしょうもないのだったら、社長が起きて電話ごしにきれるんで黙ってましょうよ。」

宇多「そうだな。」
シューーン　ガチャッ
培句「はいっ、こちら有限会社野丸です。はいっ、はいっ。お世話になっております。はいっ、はいっ。」
苑自「びっくりしたー。人間の動きじゃありませんでしたよ。」
宇多「人間は危機的状況になると、何でもできるって本当だな。」
培句「みんな、喜べ。とうとう…」
苑自「倒産ですか？」
培句「なんで倒産して、喜ぶんだよ。違うよ、仕事が来たんだよ。」
苑自「世の中には、物好きもいるもんですね。」
培句「やかましいわ。これから、契約結びに行ってくるから。」
宇多「でも、まだ表には、感電雪があるんですよ。」
培句「何を言うか。有限会社の経営者が、こんなものに負けてられるかい。」
苑自「そうですか。じゃあ、感電死するかもしれませんけど、いってらっしゃい。」
培句「やはり、きちんと計画を立てていこう。」
皆「びびってる・・・（心の声）」
次回、この日2回目の会議が開かれる。

師走の沙汰も雪次第（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
本文にも書きましたとおり、次回に続きます。
次回、重大発表があります。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

重大発表！（前書き）

前回のあらすじ　前回を読むこと
えっ？重大発表？それは、後書きでです。

重大発表！

本日第2回会議
宇多「起立、気を付け、礼。」
培句「じゃあ、今すぐにここから脱出できる方法が何か思い付いた人。」
・・・・・
培句「なんもないの？」
苑自「びっくりするぐらいに、何も浮かびませんね。」
培句「今使ってる、電気ストーブだけで、どれぐらい電力が消費されるんだ？」
苑自「少なくとも、今日中には社長を感電死させるぐらいの、電力は残ってますね。」
培句「契約は、今日までなんだよおおお。」
佐藤「また社長が壊れ始めましたね。（心の声）」
宇多「いったん希望の光が見えてから、絶望のふちに叩き落されたら、人間はこうなるんだな。（心の声）。」
苑自「平野さんとかだったら、感電しても大丈夫なんじゃないですか？」
培句「平野さん、どう？」
平野「・・・・・。」
培句「シカトかい？」
苑自「いえ、今、平野さんは首が約コンマ数度横に動いてました。」
培句「君も、そろそろ口で一言言えるようにしなさいよ。」
プッ　グサッ
培句「何で、今吹き矢打たれた？私、なんか悪い事いったか？うちには、まともな社員はいないのかよおおお。」
宇多「おい、また社長が壊れ始めたぞ。苑自君なんか、研究室の奥にないのか？瞬間移動できる装置とか。」

苑自「あるといえば、あります。」
培句「じゃあ、何で早くださねえんだよおおお。」
苑自「分かりましたよ、今持ってきますよ。」
5分後
苑自「持ってきました。ああ、重かった。」
宇多「何これ？ポスト。」
苑自「どこでも、『好きなところにもの送れるものを送れる機械』ですよ。」
培句「私は葉書か？そんなポストだけ持ってきて、どうしようってんだよ？」
苑自「そうじゃありませんよ。コレは古いポストを改造して作ったんですよ。空間にものすごい重力をかけて、遠いところと無理やり繋げる事ができるんです。」
宇多「じゃあ、契約先の会社のオフィスと繋げれば・・・」
苑自「ええ、そうですよ。実際にやってみましょうか？」
ウオオーン
宇多「なんか、外の景色が写ってきたぞ。」
苑自「今、ここと、今移ってる場所は空間がつながっています。ここを通れば、この場所にいけますよ。」
培句「じゃあ、早速やってくれ。」
苑自「でも、ものすごい重力がかかっているので、実際に人が通るとペシャンコになりますよ。」
宇多「そうなのか・・・。じゃあ、感電雪のほうをどこかに転送しちゃえばいいんじゃないか？」
苑自「ええ、でも。今度は、読者が嫌がらない程度に説明すると、なんやかんやで大爆発します。」
宇多「だんだんいいかげんになってきたな。」
苑自「作者も疲れてるんですよ。」
培句「どうするんだよ、もう契約まで時間がなくなってきたぞ。」
苑自「じゃあ、最後の手段ですね。」

皆「最後の手段？」
野丸　屋上
培句「何で最後の手段が、ハングライダーなんだ？お前、科学者だったらもっとましな事、考えろよ。」
苑自「中小企業の経営者は、そんなこと気にしないじゃないんですか？」
培句「なんか、所々縫った跡があるんだけど…」
苑自「まあ、去年のお正月にたこ代わりにして以来使ってませんからね。」
培句「本当に大丈夫なのか？」
苑自「計算上、雪に接触する直前に、浮かび上がります。」
培句「いや、そうは言われても…」
宇多「苑自君、佐藤さん、平野さんちょっと（小声）」
佐藤「なんですか？」
宇多「いや、社長の性格上このまま絶対飛び降りないんだよ。」
佐藤「確かに、そうですね。」
宇多「だから、皆で隙を突いて、社長を突き落とすぞ。」
苑自「おお、部長までこんなことを言う世の中になりましたか。」
宇多「とにかく、行くぞ。社長ーーー。」
培句「なんだーーー？」
宇多「靴紐がほどけてますよーー。」
培句「えっ？」
宇多「今だ、皆行け。」
ドンッ
培句「うわーーー。」
宇多「おい、大丈夫か？着地しそうだぞ。」
苑自「大丈夫です。本当にぎりぎりで浮かぶんです。」
ふわっ
佐藤「あっ、浮いてきましたよ。」
ガンッ

宇多「おい、向かいのビルに激突したぞ。」
苑自「そこの計算を忘れてました。」
宇多「このままだと、あの雪の上に落っこちるぞ。」
苑自「落ちたら、感電ですね。」
ボスッ
宇多「あれっ？社長なんともないぞ？感電するんじゃないのか？」
培句「なんともなくは無いぞ・・・。落っこちてかなり痛い。」
佐藤「あれ、ストーブが止まってますよ。」
苑自「あっ、そういうことか。」
宇多「どういうことだ？」
苑自「いえ、さっきの『好きなところにもの送れるものを送れる機械』を動かすときにあの雪を使ったんですけど、あの機械ものすごく電気を食うんですよ。そのときに、電気を使いきっちゃったんですね。いやー気がつかなかった。」
苑自主任が本当に気がついていなかったか、どうかはともかくとにかく野丸は、倒産から免れた。

重大発表！（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
今回のモチーフ落語は、愛宕山です。
えっ、重大発表？実は、この小説が掲載される、１２月１２日は作者の誕生日なんです。イエーィ・・・すいませんね、つまらなくて。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

古今東西白雪姫ｐａｒｔ２（前書き）

前回、好評だった古今東西白雪姫。
今回は、その後日談を書かせていただきます。

古今東西白雪姫ｐａｒｔ２

エンジ「いやー、えらいことになりましたね。」
王女「本当よ、おかげで今は入院生活よ。」
エンジ「あれを食べちまったら、本当は命にかかわるはずなんですけど、私が偶然病院に定期健診に来てたから、魔法といて助かりましたね。」
王女「大体、何であれ食べてやつは、平気だったの？」
エンジ「本当にあれ食べて平気な人間がいたんですか？謎は深まるばかりです。」
王女「あの王子がいる隣国とは、友好関係を切らせてもらうわ。」
エンジ「あっ、そうそう。お見舞い品持ってきたんですよ。」
王女「あんたがっ？なんか悪いものでも食べてきたんじゃないの？」
エンジ「どうぞ、抹茶アイスです。」
王女「やっぱりか。ああ、あんたはそういうやつだよ。何で、私が入院したか知ってるでしょう。」
エンジ「大丈夫ですよ、何も盛ってませんよ。」
王女「あたりまえよ、なんか盛ってたらただじゃおかないわよ。あっ、そうそう。あんたに頼みたいことがあったの。」
エンジ「なんですか？」
王女「あんたの魔法で、若返らせてほしいの。」
エンジ「いや、いいですけどその関係の魔法は、私の得意分野じゃないですよ。どっちかって言うと、苦手なぐらいですよ。」
王女「苦手ってどれぐらい？」
エンジ「失敗して、相手を破裂させました。」
王女「破裂っ？なんで人を若返らさせる魔法で、人が破裂するの？」
エンジ「魔法って言うのは、不思議なんですよ。」
王女「大体、なんで人を破裂させる恐れがある魔法を、かけようとしたの？」

エンジ「いや、別にいいかなーって。」
王女「いいわけないでしょ。どういう根拠で、その発言が出るの？」
エンジ「なんでしたら、そういう関係の魔法の専門家に紹介状書きましょうか？」
王女「最初から、そうしてもらえる？」
退院後
魔法使いグーリュー「申し訳ございません、ただいま『若返りスモッグ』の販売は中止しておりまして・・・」
王女「なんで？紹介状もあるのよ。」
グーリュー「とにかく、駄目なんです。また、後日出直してください。」
バタンッ
王女「納得できないわ、んっ？何か中で言ってる？」
グーリュー「助手君よ、『老けさせスモッグ』の調子はどうなってる？」
助手「ええ、師匠。順調ですよ、後は動物実験を残すのみです。」
グーリュー「そうか、いよいよ我らの野望も実現に近づいてきたな。」
助手「そうですね、夢の世界征服。くっくっく。」
グーリュー「こらこら、少し声が大きいぞ。ケッケッケ。」
王女「なんか、えらいこと聞いちゃったよ。オイ。」

王女「ということなんだけど。」
エンジ「大変でしたね。」
王女「世界征服なんて冗談じゃないわよ、ちょっとあんた知り合いなんだから説得してよ。」
エンジ「いいですけど、私にとってもやつは友人ですから、邪魔するというのもねえ。あっちにも、それなりの考えはあるんでしょうしねえ。こっちもやりづらいですねえ。」
王女「分かったわよ、いくら？」

エンジ「いつもと同じだけ、口座に振り込んでおいてください。」
王女「じゃあ、頼むわよ。」
エンジ「じゃあ、少し電話を借りますよ。」
プルルルルッ
エンジ「もしもし、ええ私だ。久しぶり。さっき君のところに行った人がね、うん。そう、聞いちゃったって。ちょっと今回は・・・いや、うんそれは分かるよ。うん、うん。ああ分かる、それはあるけど。こっちも得意先だから。うん、まあねえ。分かったわ、じゃあそれ行ってみるわ。うん。じゃあ、また電話するから。」
ガチャッ
王女「どうだった？」
エンジ「なんか、めちゃくちゃに王女の悪口言ってました。」
王女「何で止めないのよ。あっ、もしかしてさっき『それは分かる』って言ったとき・・・」
エンジ「あっ、そのあたりです。悪口言ってたの。」
王女「だから、何でとめないで同意するのよ。そういえば、さっきなんか言っとくって言ってたけど。」
エンジ「ええ、奴いわく。この国は、政治基盤がめちゃくちゃで、このままだと近いうちに崩壊するとの事です。そのため、まず開発中の老けさせスモッグで、全国民を衰弱させ全国民を元に戻すことを条件に、政治主導権を引き渡してもらい、国を立て直そうという策略らしいです。後、あいだあいだに、王女の悪口言ってました。」
王女「わたしは、どうなるの？」
エンジ「国外追放って言ってました。」
王女「どこの国？」
エンジ「地獄って言ってました。」
王女「事実上の処刑じゃないの。しかも、天国じゃないの？」
エンジ「あなたは、絶対地獄に行くって言ってました。」
王女「冗談じゃないわよ、ねえ、支払い追加するから説得してきてちょうだい。」

エンジ「そうですか？じゃあ、いいですけどあの若返りの話はなかったことになると思ってください。」
王女「分かったわよ、処刑よりましょ。」
その夜
プルルルル
エンジ「もしもし。ああ私だ。いやーっ、助かったよ。よく協力してくれたね。あんなめんどくさいのが、なんども若返って長生きされちゃたまらんからね。大体、お前も人を若返らせる魔法で、破裂させるもんな。一番の十八番あれだっけ？声変える奴。あっそれ使って騙したの？お前もやるねー。今度のみに行かない？思わぬ臨時収入も入ったし・・・」

古今東西白雪姫ｐａｒｔ２（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

茄茂泣の聖夜（前書き）

茄茂泣町でも、クリスマス。今年も色々あったけど、この小説で年納め。

茄茂泣の聖夜

皆「メリークリスマス。」
副町長「えー。皆さん今回私が開催したクリスマスパーティにご出席いただきありがとうございます。挨拶は、この辺にしてそれでは皆さん楽しんでください。」
苑自「おや、社長も来てたんですか？」
培句「ああ、副町長が無料で町中の人を招待したからな。」
苑自「今の副町長はいい人ですね、次の町長はあの人がいい。」
培句「まあ、今の町長仕事できないからな。」
苑自「社長が言うことでもないですけどね。」
培句「何っ？」
宇多「あっ、苑自君、社長。」
苑自「なんだ部長も来てたんですか？」
宇多「ああ、それはいいけど。なんか、さっきから託児室から変な声が聞こえないか？」
苑自「ああ、あれ家（うち）の娘です。」
宇多「おい、娘さん大丈夫か？なんか病気とかじゃないか？」
苑自「いえ、あれ百人一首やってるんです。」
千早ふる～～
苑自「ほらね。」
培句「いや、『ほらね』じゃないよ。なんでクリスマスに百人一首やってるんだよ。」
苑自「やっちゃいけなんですか？」
宇多「いや、いけないわけじゃないけど・・・普通正月にやるもんだろ」

副町長「えー、お待たせいたしました。ただいまよりクリスマスプレゼントビンゴ大会を開催いたします。」

宇多「あっ、なんか始まるみたいだぞ。」
副町長「ルールを説明いたします。ビンゴになった方は、箱の中に入っているボールを引いていただき、そのボールに書いているのと同じ商品を獲得することができます。それでは、お手持ちのビンゴカードの中央をあけてください。では、いきます。」
５分後
副町長「では、４７番。」
？？？「ビンゴ！」
副町長「おお、なんと最短ビンゴ。では、確認させていただきます・・・」
宇多「おい、すごいな。まだ、４つ目だぞ。あれっ？」
副町長「はい、間違いありません。それでは・・・」
宇多「もしかしてあれ佐藤さんじゃないか？」
苑自「あっ、本当だ。あの人、あんなに運がよかったでしたっけ？」
培句「今頃、佐藤さんに新しい特徴が出来たな。」
苑自「作者も、お茶キャラだけじゃ無理があると、うすうす気づき始めたんですよ。」
副町長「おめでとうございます、本日の一番いい商品がいきなり出てしまいました。『豪華３泊４日高級料理食べつくし温泉旅行』です。」
佐藤「やったー。」
副町長「まだ、いい商品はたくさんあるんで皆さんあきらめないでください。では、５３番。」
町人Ａ「ビンゴ！」
副町長「おや、今日は次々とビンゴが出ますね。では、・・・はい間違いありません。それではどうぞ。おや、本日２番目にいい商品が出ました。『まみくん・めもちゃんストラップ』です。」
宇多「いや、１番目と２番目の商品に差がありすぎでしょう。」
培句「でも、これあれじゃないか。なんか、期間限定で作られたすごいプレミアがある奴とか・・・」

苑自「いや、あれ普通の奴ですね。その辺で２００円ぐらいで売ってる奴。」
宇多「あの人、ショック受けすぎてビンゴカード落としてますよ、あっ、倒れた。」
副町長「ええ、続いていきます。２４番。」
苑自「あっ、ビンゴだ。ビンゴ！」
副町長「はい、間違いありません。それでは・・・おめでとうございます。１年間所得税免除券です。」
苑自「えっ、何でこんないいものが２番目にいい商品じゃないんですか？」
副町長「よく、隅のほうを見てください。」
苑自「えっ、なになに。『ただし町長の家にあそびにいかなければいけない』・・・」
副町長「ここに、町長のはんこを押して来てください。」
こうして、茄茂泣町の夜は過ぎていく・・・

茄茂泣の聖夜（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
皆さん、楽しいクリスマスをお過ごしください。
では、メリークリスマス。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

茄茂泣の新年（前書き）

あけましておめでとうございます。本年も茄茂泣町の連中をよろしくお願いします

茄茂泣の新年

皆「あけましておめでとうございます。」
培句「ええ、昨年はいろいろありましたが、今年もよろしくお願いします。」
皆「お願いしまーす。」
宇多「じゃあ、さっそく仕事といきますか。」
培句「そこに問題がある。」
宇多「はいっ？」
培句「宇多君、君、長い間この会社に勤めてるけど、新年早々仕事が有るような景気のいい話があったか？」
宇多「…ないですね。」
苑自「じゃあ私はこの辺で。」
培句「ちょっと、苑自君、なんで帰ろうとしてるの？」
苑自「いや、どうせ仕事ないんで…」
培句「いや、仕事入ってくるかもしれないじゃん。」
苑自「そんな毛ほどの可能性にかけるなら、家帰って娘と人生ゲームでもしてますよ。」
培句「いや、だから…ちょっと、平野さん達も帰る準備してるの？ちょっと待てよ…ああ、あれがあった。」
１５分後
佐藤「なんですか、これ？」
培句「うちの会社にきた大量の年賀状だよ。」
苑自「なんで、こんなに年賀状が来るのに、仕事は来ないんでしょうね。」
培句「やかましいわ。今日はこれを全部チェックして、だしそびれがないか確かめるんだ。」
皆「はーい。」
宇多「どれどれ。大体みんな同じだな。謹賀新年、あけましておめ

でとうございます、あけましておめでとうございます、謹賀新年、謹賀新年、謹賀新年、菌がっ死ねっ…？」
培句「おい、誰だこれ送ってきたの？」
宇多「えーと…茄茂泣病院ですね。去年色々迷惑かけましたからね。（第６話参照）」
培句「それにしても、相当恨まれてたんだな。人を死なない様にどうにかする病院から『死ねっ。』って来たぞ。」
宇多「どうします、これ？」
培句「じゃあ、今後積極的にご贔屓させてもらうか。」
宇多「いや、あんまり病院に積極的にご贔屓させてもらいたくないですよ。」
佐藤「あの、料亭茄茂泣から喪中はがきが来てますけど…」
培句「ああ、大丈夫そこは出してないから。」
佐藤「何々、当店の池で飼っていた錦鯉が全滅しました・・・。何があったんでしょうね？（第１１話参照）」
苑自「おそらく、汚水か何かが混ざったんでしょうね。あと、なんか血液センターからも年賀状が来てますよ。小森さん宛てに。（第７話参照）」
培句「小森さん、いた事忘れてたな。」
苑自「作者も、登場させる場面がないから、こういう場面で登場させなきゃいけないと思って、焦ってるんですよ。」
培句「何でそんなことわかるんだ。」
苑自「年賀状に書いてました。」
宇多「何で作者から年賀状が来たんだ？」
苑自「作者め、出すぎたマネを・・・」
平野「・・・・・」
宇多「平野さんどうしました？これ、交番からですね。」
培句「何で交番から、年賀状がくるんだ？」
苑自「社長、とうとうあのことがばれましたね。」
培句「何もないくせに、そういうこと言うなよ。平野さんが何かし

らのアクシデントを期待した、目をしてるぞ。」
宇多「なになに、智理(ちり)警部補？あっ、あの交番のお巡りさんか。（第８話参照）えーと、昨年の功績をたたえられ、波泣町に異動となりました・・・」
佐藤「作者、もう智理さんのこと出さないつもりですね。」
宇多「ああ、これでまた必要になったら、また茄茂泣町に異動になるんですよ。」
苑自「作者め、汚いやつめ・・・」
宇多「じゃあ、社長出しそびれはありませんか？」
培句「いや。」
宇多「どこですか。」
培句「去年、葉書を買うお金がなかったから一件も出してないんだ、これから皆でかくから苑自君、印刷頼むよ。」

茄茂泣の新年（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
今回は、半分総集編のような形になりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

ＲＰＧ（ろくでもないピープルの娯楽）（前書き）

どうにか年は越したけど、相変わらず仕事がない野丸。
この人たちの仕事はもはや、暇つぶし探しともいえるでしょう。

RPG（ろくでもないピープルの娯楽）

培句「暇だな。」
宇多「暇ですね。」
佐藤「こういうときに限って、苑自さんが何かやらかしてくれればいいんですけれどもね。」
培句「あいつは、こういう時に限ってまじめに働くな。」
ガチャッ
苑自「やあやあ、皆さんお暇のようですね。」
宇多「いや、大体お前が出現すると暇じゃなくなるけど、なんかあるのか？」
苑自「本日は、私が前から開発していたゲームソフトが完成したんですよ。」
培句「販売用のやつか？」
苑自「ええ、ですので皆さんに一度体験していただきたくて。」
培句「そうか、私達みたいな年寄りはなかなかゲームなんてしないけど、今はすごい技術が進んだらしいな。」
苑自「じゃあ、これテレビにつないでください。」
培句「でも、このオフィステレビないぞ。」
苑自「映像が映る機械なら、テレビじゃなくてもいいんですけど。」
培句「いや、そういうのもないな。研究室のパソコンじゃ駄目なのか？」
苑自「あれ、安いやつなんで繋ぐと、壊れますよ。」
培句「どうにかならんのか？」
苑自「じゃあ、あの手でいきますか。」

向井部長「社長、向かいの野丸のやつらに、うちのオフィスの壁にスライドが映されました。」
向井社長「なに？ちょっとお、野丸の人何やってるの？」

苑自「ゲームですよ。」
向井社長「いや、『ゲームですよ』じゃなくて、何で人の建物使ってゲームやってるの？」
苑自「あの、プロジェクターがあるんですけど、うちの室内じゃ小さくて全部映らないんですよ。」
向井社長「いや、困りますよ。道行く人に何事かと思われるよ。」
苑自「じゃあ、テレビ的なもの貸してください。」
１０分後
苑自「繋がりました。」
宇多「じゃあ、始めるか。」
カチッ　カチッ　カチッ　カチッ　ピーピロピロピー
佐藤「なんか、ずいぶんレトロですね。」
宇多「本当だよ、画面に映るまで5回ぐらい電源入れなおしたぞ。」
ゲーム「名前を入力してください。」
培句「名前どうする？」
佐藤「やっぱり、『ノマル』じゃないですか？」
培句「そうか、ノ、マ、ル。」
ゲーム「『トクサブロウ』でよろしいですか？」
培句「いや、『ノマル』って入れたじゃん。何、最初からそのバグ。」
宇多「社長、もういいじゃないですか。ここで、突っ込んでたら体が持ちませんよ。」
培句「そうか、『はい』っと」
ゲーム「名前は5文字までしか、登録できません。」
宇多「何だよ、このゲーム。」
苑自「小粋なジョークですよ。名前はちゃんと登録されてますよ。」
宇多「いや、すごい腹立つよこのジョーク。もしくは、本当にバグだと思われるよ。」
苑自「あっ、始まりますよ。」

ノマル「お父っつあーん。」
ノマル父「息子よ、父ちゃんはもう駄目だ・・・」
ノマル「大丈夫だよ、父ちゃんの薬代ぐらい俺が稼ぐよ。」

培句「なんで時代劇調なんだよ。」

ノマル父「いいか息子よ、ここでは政府が頼りないせいで、税金が極端に高くてろくに食べ物も買えやしねえ、国王はメンタルが弱くマスコミにつつかれただけですぐに辞任して、ちゃんとできる側近は裏金で事情聴取される始末だ。このままじゃ、犠牲は俺だけじゃとどまらねえ。」

培句「なんかシビアだし、どっかの国で見た光景だよ。」

ノマル「分かったよ、お父っつあんの敵は俺が討つよ。」
ゲーム「かくして、勇者ノマルの旅は始まったのであった。」

ＲＰＧ（ろくでもないピープルの娯楽）（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

コントロールは慎重に（前書き）

まあ、前回の続きですよ。はい。
この頃、この小説へのアクセスが減り落ち込む作者であった。

コントロールは慎重に

苑自「じゃあ、外に出てアイテムを買ってください。」
培句「じゃあ、この店に入るぞ。」

ゲーム（武器屋）「お若い方、何かお求めかな。カーッペッ。」

宇多「武器屋なんかヨボヨボだし、室内でタンはいたぞ。」
培句「今のお金で買えるのは・・・『普通の剣』か。じゃあ、これにしよう。」

武器屋「『そこらへんの藻』でよろしいかな？」

宇多「武器屋の爺さん、耳遠すぎるだろ。」
佐藤「『そこらへんの藻』ってどんなアイテムですか？」
苑自「３つ集めると、一番回復能力が低い薬になるってアイテムですけど、実は薬を直接買った方が安いっていうアイテムです。」
培句「いらねえよ、そんなの。キャンセル。」

ゲーム「ノマルは『そこらへんの藻』に全財産をつぎ込んだ！」

培句「だからキャンセルにしたじゃん。バグが多すぎるよ。」
宇多「どうすんだよ、全財産なくなった上にアイテムが『そこらへんの藻』だらけになったぞ。」
苑自「じゃあ、仕方がないので外で宝箱を探してください。あっ、あそこにありましたよ。」

ゲーム「ノマルは宝箱から『最強の剣』を手に入れた！」

佐藤「『最強の剣』ってどんなアイテムですか？」
苑自「ザコキャラからラスボス含め、すべて一発で倒せて無限に使えるっていうアイテムです。」
培句「いや、おかしいだろ。何で序盤から・・・」
苑自「でも、まだ防御力がありませんから。」
培句「まあ、そうだけど。」

ゲーム「ノマルは宝箱から『最強の鎧』を手に入れた。」

佐藤「『最強の鎧』って、どんなアイテムですか？」
苑自「ザコキャラからラスボスを含め、すべての攻撃を無効化してしかも絶対壊れないっていうアイテムです。」
培句「だから、おかしいだろううって。何で序盤からこんなの手に入るんだよ。もうちょっとシナリオちゃんと考えろよ。」
苑自「考えたの私じゃないですよ、近所に住んでる元作家の、この頃少しポーっとしている爺さんが考えたんですよ。」
培句「仕事をポーっとしている爺さんに任せるなよ。おかしすぎるだろ。」
苑自「社長、いろいろ言いますけどゲームしないって言ってたのに、何が分かるっていうんですか？」
培句「ゲームの知識がなくても、お前にない『常識』っていうものがあればおかしいのは分かるよ。」
苑自「とりあえず、先に進みましょう。」
２０分後
培句「とうとうきたな、最後の城。」
宇多「『とうとう』って程のこともないでしょう。すごい短かったですよ。最強アイテムのせいで。」
培句「じゃあ、扉を開けるぞ。」

ゲーム（国王）「よく来たな、貴様などひねりつぶしてくれるわ。」

培句「じゃあ、また『最強の剣』で・・・」

ゲーム「最強の剣に、藻が生えてしまった！」

培句「苑自君、何これ？」
苑自「『そこらへんの藻』はほっとくと、ほかのアイテムも『そこらへんの藻』になるんですよ。」
培句「なに、その迷惑さ。じゃあ、もう使えないの？」
苑自「とりあえず、素手でも攻撃できますよ。」
培句「なんだよそれ、しょうがない。」

ゲーム「ノマルは素手で国王を攻撃した、国王は倒れた！」

培句「えっ、なんで？」
苑自「国王は普通の人間だから、素手でやられるんです。」
培句「素手でやられる人間が、剣持った人間にひねりつぶすって言ったの？その強気があって、何で政治ができないの？」
苑自「意外性を狙いたくて。」
宇多「これ、売れますかね。」
培句「無理だろうな。」
かくして、向井ビルからテレビを借りたことは忘れ去られ、いつの間にか給湯室で使われていたそうな。

コントロールは慎重に（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
この頃、アクセスの減りに落ち込んでいます。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

盗んだ爆弾5秒前（前書き）

前にハイジャックの話をこの小説で書きました。
要は、その後日談です。

盗んだ爆弾5秒前

置き引き（弟）「兄貴、うまくいったね。」
置き引き（兄）「ああ、これだけ大きければ、中身も期待できるぞ。」
パカッと
弟「・・・・・」
兄「弟よ、なんだこれは？」
弟「分かんないけど、なんかの機械だね。」
兄「あーあ、こんなもの何に使えばいいか分からねえよ。ハズレだな。」
弟「せっかく、重いやつ運んで来たのにな。あーあ、面白くない、テレビでも見るか。」
ポチッ

アナウンサー「さあ、私は今、茄茂泣空港から中継をつないでます。あっ、出てきました。今回のエイプリルコンテストで優勝を勝ち取った、野鳥さんです。」

兄「まったく、世の中にはついてる奴もいるもんだな。」

アナウンサー「では、野鳥さんにはこちらの席でお話しをお伺いしたいと思います。そして、ゲストには軍事評論家の網田≪あみだ≫先生です。」

弟「なんで軍事評論家がゲストなんだ？」

アナウンサー「さて、今回は野鳥さんはハイジャックの嘘で優勝されたわけですか。何か感想はございますか？」

野鳥「はい、えーとですね…えーっ、はい。まあ、そういう事です。」
アナウンサー「・・・。えっ。ああ、なるほど大変参考になりました。」
弟「ちょっと、兄貴。」
兄「んっ、どうした？」
弟「なんか、いじってたら、タイマーみたいのが動き出した。」
兄「さっきからピッピッ言ってるのそれか。うるさいから止めてくれよ。」
弟「それが、さっきも適当にいじってたから止めかた分からないんだ。」
兄「じゃあ、もういいから。壊しちまえよ。そこに、工具箱あったろ。」
カンッカンッ
弟「駄目だ、ぜんぜん壊れない。」
兄「じゃあ、しょうがねえな。どっかに捨てるか。どれ、結構重いな。」

アナウンサー「では、続いては野鳥さんが実際に使用した偽物の爆弾を見てみましょう。」
野鳥「はっははは。こここちらになります。」

弟「兄貴、なんかこのテレビに出てるやつと、兄貴が今もってるやつ似てない？」
兄「えっ、でもまさか。」
弟「でも、ここに入ってるロゴと、これ同じだよ。」
兄「いやいやいや、仮にそうだとしてもあれ偽物だろ。じゃあ、こっちも・・・」
弟「でも、普通たかだかエイプリルフールコンテストのために、２

つもこんなこった偽物用意しないだろうし、それに・・・」
兄「うるせえよおおお、こっちだってうすうす気づいてるけど怖くて口に出せないものを、やすやすといいやがって、こっちは手に持ってるんだよおおお、ドカンてなったら作者の度胸じゃ書き表せらレナい状況になるんだよおお。」
弟「兄貴、落ち着いて。早く捨てに行こう。」

網田「このタイプに爆弾だとですね、ハイここにある装置ですね。ここがわずかなゆれを探知して爆発します。」

兄「余計なこと済んじゃねえよおお。」
弟「兄貴、警察を呼んで爆弾を解除してもらおうよ。」
兄「馬鹿やろう、警察なんか呼んだら、しょっぴかれるぞ。俺達の盗んだものは、捜索願いだされてるかもしれないんだぞ。」

アナウンサー「じゃあ、仮にこの爆弾が本物でもし起動してしまったら、どのように解除すればいいんですか？」

弟「アナウンサー、いいこと言った。」

野鳥「ええと、それはですね・・・」
網田「野鳥さん、これを説明すると時間がかかって、放送時間が間に合わなくなります。まあ、そんなことないでしょうから、心配することもないでしょう。」
アナウンサー「そうですね。」

兄「評論家ああ。よけいなことすんなよおおお。アナウンサーもちょっとねばれや、こっちは体が四散する危機なんだよおおお。」

アナウンサー「では、ここで野鳥さんに電話で質問のコーナーです。

視聴者の皆さん、ドシドシ電話してください。」

弟「兄貴、しょうがないからここで質問しよう。」

プルルルル
アナウンサー「まず最初は、波泣町在住の5歳の時次郎くんです。」
時次郎「時次郎、5歳です。野鳥さんは、飛行機は好きですか。」

兄「くだらねえこと聞いてんじゃねえよおお、こっちは、後二時間しかねえんだよおお。」

野鳥「えーっ、はい。飛行機を飛ばすということはですね。色々な科学的要因が絡んでくるわけです。つまり、あーでこーで。（この間約5分）以上の点から、私は飛行機に大変興味を持っています。」

アナウンサー「ええ、野鳥さんが思ったより長くお話しされたので、次が最後のお電話となりました。」

弟「兄貴、いくぞ。ラストチャンスだ。」
兄「ああ。」
プルルルル
ドクドク
ガチャッ
アナウンサー「はい。」
続く

盗んだ爆弾5秒前（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

行き先は分かるがなかなか行かれない（前書き）

前回を読めばあらすじは分かります。
なんだかなああ。

行き先は分かるがなかなか行かれない

弟「やったよ、兄貴。通じたよ。」
兄「きっ奇跡だ。」
アナウンサー「お名前とご質問をどうぞ。」
弟「えーっと、名前は匿名希望で、あの爆弾はどうやって解除すればいいんですか？」
野鳥「えっ、えーとですね。つまりね。ちょっと待ってね。えーとですね。」
兄「さっきまでペラペラしゃべってたのに、なんでまたあがってるんだよ。」
野鳥「つまり、はいそういう事ですね。」
ガチャッ
弟「・・・・・」
兄「もう駄目だああ。」
弟「じゃあ、もう最後の手段でいくか。」
兄「最後の手段？」
弟「町の離れにちょっと高めの崖があるじゃん。あそこに捨てに行こうよ。」
兄「でも、揺れると爆発するぞ。」
弟「だから、兄貴が爆弾ごと台車に乗って、俺が揺れないように押して、崖まで爆弾を持っていけばいいんだよ。」
兄「大丈夫なのか？」
弟「でも、どの道、後1時間しかないよ。」
兄「もうこうなりゃヤケだ。」
弟「じゃあ、行くよ。はい、そこ段差あるから、足を上げないで摺り足でそうそう。乗った？」
兄「乗ったよ。」
弟「じゃあ、出発。」

５分後
ひそひそ
町人Ａ「ねえ、何あれ？」
町人Ｂ「さあ、チンドン屋か何かじゃない？」
町人Ａ「でも、それにしちゃ地味よ。」

兄「なお、弟よ。」
弟「どうした？」
兄「めちゃくちゃ恥ずかしいんだけど。もう少し、人通りの少ない道無かったのか？」
弟「いや、ここしかないよ。」
兄「それにしてもさ・・・子どもが指差して笑ってるんだよ、なんか母親に『近づいちゃ行けません。』って怒られて泣いてるし。」
弟「この１０分間で５回ぐらい見た光景だよ。」
子どもＣ「お母さん、見て見て！」
弟「こら、どっか行けって。」
兄「もう、いいよ。ほっとけよ。もう」
母親「こら、こっち来てなさい。」
兄「ほらな。」
母親「時次郎ちゃん、さっきテレビの質問に電話してあげたでしょ。言う事聞きなさい。」
兄「お前かいいいい、こっちはお前のくだらねえ質問で死にかけとるんじゃあああ。」
時次郎「うわあああああん。」
兄「早くいくぞ。」
１５分後
キキーッ
弟「なんか、車止まったぞ？」
チンピラ「お前らかい？」
弟「へっ？」

チンピラ「うちの若頭泣かせたのは、あんたらかいって聞いてんだよ。」
弟「若頭と申しますと、先ほどの・・・」
チンピラ「何やったか知らないが、子どものやった事なら一言優しく注意してやりゃいいんと違うか？」
兄「え、はい。」
チンピラ「いい加減にせえよ、我。おっと警察か、ここは引いとくがこれから夜道は気を着けな。」
兄・弟「・・・・」
5分後
弟「着いたよ。捨てて。」
兄「ああ。」
確して、彼らは爆弾を捨てた。しかし、彼らはもっと大きな爆弾を背負う事となった。

行き先は分かるがなかなか行かれない（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・
これを書いた次の日、ボウリング大会です。

苑自主任の地獄旅行（前書き）

毎度お騒がせの苑自主任今回は少し、ただ事ではない事が起こったようで・・・

苑自主任の地獄旅行

通行人Ａ「おい、あんた大丈夫か？おい、誰か来てくれこの人頭打ったぞ。救急車を呼んでくれ。」
５分後
茄茂泣病院
通行人Ａ「松倉先生、あの人どうなりました？」
松倉「まあ、軽く血止めをして、ちょこちょこっとやれば大丈夫でしょう。」
通行人Ａ「大丈夫でしょうって、あの人かなり強く打ってましたけど、そんないい加減でいいんですか？」
松倉「あなたは、この町に越してきたばかりで知らないでしょうけど、あの人はこの辺ではかなり有名な苑自さんって人なんですよ。こんな事で死ぬ人じゃない。」

？？？「おい。起きろ」
苑自「あんた誰だよ？」
死神「わしは死神だ。単刀直入に言う、お前さんは死んだぞ。」
苑自「死んだ？そんなはずないんだがな。ああ、さっき転んだ時頭でも打ったか。はいはい、そういう事ね…」
死神「ほら、長年付き合った体との別れだ。一言なんかいってけ。」
苑自「そうですか、じゃあ長い間お世話になりました。これからもよろしくお願いします。」
死神「『これからもよろしく』ってもうあの世にいったら縁がないんだよ。」
苑自「死神さん、あんたもしかして新人かい？その着てるやつ、名前なんていうか分からないけど、随分新しいよ。」
死神「そうだよ、だから早くもどらねえと怒られちまうんだよ。」
苑自「死神さん、あそこのあれなんだろうね？」

死神「えっ？」
ガンッ　よい子はまねしないでね
死神「うっ。」
苑自「こういうとき、いつも持ってるスパナが役に立つ。さてとじゃあ、この着物を借りますよ。動けないように、茄茂泣寺のお札をはって、なんかお経とか書いておけばまあ、どれかひとつぐらい聞くだろう。」
１５分後　地獄
先輩死神「おい、新人何やってたんだ？」
苑自「すいません、途中でターゲットが生き返っちゃって。」
先輩死神「そうか、じゃあデータをちゃんと処理しておけよ。」
苑自「はい、じゃあ、あのパソコンを使わせてもらいますよ。よくも、殺しやがったな。仕返しだ。（心の声）」
２０分後
死神Ｂ「先輩、大変です。」
先輩死神「どうした？」
死神Ｂ「何者かが、システム内にウイルスを流し込みました。」
先輩死神「なんだって、すぐに全死神を集めろ。お前らは、本部に連絡だ。」

苑自「ずいぶん、あわただしいですけど、どうかしましたか？」
死神Ｃ「なんか、システムにウイルスが入ったらしいぜ。」
苑自「おや、意外と早くバレたな。じゃあ、あっちもやっておくか。（心の声）」
死神Ｃ「まったく、物騒だよな。本当に、ブツブツ」
苑自「じゃあ、あっちも済ませておくか。（心の声）
先輩、私ちょっと行ってきます。」
死神Ｃ「おい、ちょっと待てよ。あれ、あいつ同僚だよな？」
先輩死神「最後にアクセスしたのは、あの新人か。おい、あいつは

どこだ。」
死神C「さっき、出かけました。」
死神B「先輩、身ぐるみをはがされた新人が見つかりました。」
新人死神「さっき、つれてこようとした亡者にやられました・・・ガクッ」
先輩死神「おい、新人。おい。さっき、お前らが会った偽者を、早く見つけ出せ。なにをしでかすか分からないぞ。」
1時間後　三途川
死神C「いたぞーーー。」
苑自「おや、見つかったか。じゃあ、おとなしくつかまりましょう。」

先輩死神「閻魔様、このリストが今日の分の亡者です。」
閻魔「どれどれ…んっ？なお、この茄茂泣町地区のリスト間違ってないか？」
先輩死神「いえ、本日確実に三途川渡りを確認しました。」
閻魔「もしかして、こいつもか？」
先輩死神「あっ、申し訳ございません。報告を忘れておりました。実はこの亡者が地獄データシステムにウイルスを入れまして、ただ今復旧作業を急いでおります。しかし、復旧が間に合わない場合もしかしたら、本当は死んでいるが、戸籍上だけ生きているというケースが出る恐れがあります。奴は牢に入れておきました。」
閻魔「何、もう何かやらかしたのか？おい、ちゃんとチェックしなかったのか？あいつは地獄ブラックリスト登録者だぞ。」
先輩死神「はい、前科も無かったので、チェックしていません。」
閻魔「えらいことになったぞ。いいか、よく見ろよ。あいつ生前の行いリストだ。」
先輩死神「えーと、学生時代は天才的な成績を収めたが、天才的な彼を平等制を推し進めていた教育会は好んでおらず、その事に不満

を持った事で悪戯に対し、恐るべきほどの才能を発揮する。挙げ句の果てには、才能を見込まれて対立国から同時に最新兵器の開発を依頼され、同時に働いていたが、両国の軍事工場を吹き飛ばした過去がある。（事故か故意かは不明）・・・」
閻魔「分かったか？」
先輩死神「いや、でもこれぐらいならほかにもいますよ。」
閻魔「確かに、生前これぐらいやったのなら沢山いるよ。あいつは、地獄でもおなじようなことやったんだよ。３年前に」
先輩死神「と、おっしゃいますと？」
閻魔「今度、近代地獄史の教科書にも載るが、隣で捕まってた、凶悪亡者の檻の鍵を開けて、暴動を起こし、三途川に佐藤茶とかいう廃液を流し込みかけたから強制送還したんだ。本当にあの時は地獄で『地獄のようだ』って言っちゃったよ。そのときに、あちら様の承諾がない間にはこっちには連れて来れない契約書をかかされたんだよ。それを連れて来ようものなら、仕返しをするって言われたんだ。」
先輩死神「そういえば、さっき部下が三途川で奴を捕まえたそうです。」
閻魔「もしかして、なんか仕掛けたんじゃないか？おい、ちょっと牢に電話を繋いでくれ。」
プルルル
苑自「何だ、閻魔さんか。」
閻魔「苑自さん、ちょっと部下の手違いでこんなことになってしまい、なんと申しますか・・・大変申し訳ございませんでした。後で、菓子折りを送っておきます。」
苑自「菓子折りって言ったって、あの『地獄饅頭』っていうメチャクチャからいやつでしょ、地獄じゃなくて痔獄になっちゃうよ。私、甘党なんだよ。それだったら、パンフレットでもくれよ、うちの社長がもう少しでそっちの世話になりそうだから。」
閻魔「それで・・・あの三途川になにかされましたでしょうか・・・

？」
苑自「ああ、遠隔操作で佐藤茶が混ざるようにしたよ、でももう二度とこういうことがないようにしかけたままにしておくから。じゃあ、私帰るんで。」
閻魔「えっ、ちょっと待って。」
ガチャッ
先輩死神「・・・・・」
松倉「おや、苑自さん目が覚めましたか。」

苑自主任の地獄旅行（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
今回のモチーフ落語は「地獄八景亡者戯」です。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

社員を試合に連れてった。（前書き）

野丸のメンバーは、相変わらず元気です、そして相変わらず暇です。
今日は、向かいの向井ビルの人たちと草野球です。

社員を試合に連れてった。

向井社長「野丸さん、今日こそ頼みますよ。」
培句「何をですか？」
向井社長「この前、貸したテレビがまだかえって来てないんですけど。」
培句「えっ、テレビなんて借りてましたか？」
宇多「今、給湯室で使ってるやつじゃないですか？」
培句「ああ、そうか。あれか、忘れてた。」
向井社長「大体、借りたもの忘れるやつはそういうんだよ。今日こそ、返したもらいますからね、ゲームの回から、かなり経ってるんですから。」
苑自「じゃあ、今日の試合で勝ったら、もらっていいですか？」
向井社長「いや、駄目ですよ。それだったら、私たち、どの道損しかしないでしょう。」
アナウンス「それでは、両チームはベンチに戻って、準備運動を始めてください。」
培句「じゃあ、失礼します。」

培句「え、ん、じ、く、ん」
苑自「何ですか？いつにも増して気持ち悪い。」
培句「ところで、天才発明家さんちょっとバットを貸してほしいんだけど。」
苑自「別にいいですよ。」
培句「どれどれ・・・あれ、スイッチとかないけど、これどう使うの？」
苑自「何言ってるんですか？バットにスイッチなんかある訳ないでょう。」
培句「えっ、じゃあこれ、普通のバットなの？」

苑自「ええ、そうですけど。」
培句「おい、ちょっと待てよ。皆大変だぞ、苑自主任、何も用意してないぞ。」
宇多「おい、嘘だろ。これ、賞金かかってるんだぞ。お前がなんか作ると思って、何も練習してないぞ。」
苑自「いや、スポーツは努力によって勝利を勝ち取るものでしょう。」
宇多「どうした、お前はそんな常識的なこと言うキャラじゃないぞ、絶対何か作っていんちきするタイプだぞ。」
苑自「いや、珍しく練習したんです。」
培句「おい、どうするんだよ。４０過ぎのおっさんが2人もいるんだぞ。」
苑自「しかも、無練習の。」
佐藤「あの、社長・・・」
培句「おい、やめてくれよ。これ以上なんかいうの・・・」
佐藤「いえ、今ここに8人しか、いないんですけど。」
培句「えっ、ちょっと待てよ・・・私と、宇田部長、苑自主任、佐藤さん、平野さん、マドギワA、マドギワb、小森さん・・・　あれっ？」
佐藤「助っ人とか、いないんですか？」
培句「あれ、マドギワ族ってもう何人かいなかったっけ？」
苑自「そんなに、たくさんの社員に、この今の満足でない給料でも、払えるほどうちは儲かってますか？」
培句「いや、ちがうけどさ。でも、マドギワたちって戦闘員みたいなものじゃん、もっとたくさんいそうじゃん。」
宇多「社長が、自分の会社の社員に何てこと言うんですか。」
佐藤「どうするんですか？」
培句「苑自君、なんか助っ人ロボットみたいなの作れないのか？」
苑自「無理ですね、工具とかもないんで。」
培句「誰か、来れそうな野球がうまい知り合いとかいないのか？」

苑自「あっ、そうそうあの手がありました。」
培句「なんだ？」
苑自「私の開設してるブログによく来る人に、なんだかプロ野球の2軍か3軍の選手の人がいるんです。今度、暇だからいつでも呼んでくれって言ってるんです、」
培句「そいつはいいや、早く呼んでくれ。・・・なんで手を差し出してるんだ・・・2千円でいいか？
」
苑自「はい、どうもありがとうございます。それじゃあ・・・もしもし、うん、今、茄茂泣グラウンドだから。うん、急いでね。」
宇田「どうだった？」
苑自「来れるって言ってました。」
宇多「ブログって、どんなのやってるの。」
苑自「『上司が尊敬できない優秀な部下の会』っていう会です。」
宇多「上司に向かって堂々と言うせりふじゃないだろ。」
苑自「ちなみに、前、出張で使った飛行機の副機長と、茄茂泣町の副町長も会員です。」
宇多「なに？茄茂泣町の部下は、そんな腹黒いのしかいないの？その選手は何で上司嫌いなの？」
苑自「いつまでも、一軍に上げてくれないかららしいです。実力がないくせに」
宇多「逆恨みじゃねえかよ。」
かくして、プレイボールとなった。

社員を試合に連れてった。（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
次回、とうとう試合開始です。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

2階裏あっ間違えた2回裏（前書き）

前回の続きです。
思い出せない方は、第３０話をお読みください。
ＰＳ　いつの間にか、３０話にまでなってました。

2階裏あっ間違えた2回裏

苑自「あっ、来ました。」
山本「どうも、助っ人の山本です。よろしくお願いします。」
培句「苑自君、ちょっと。」
苑自「何ですか？」
培句「あのさ、文字だけだから、読んでる人は分からないけどさ。何あれ？」
苑自「助っ人の山本さんですよ。」
培句「そうじゃなくて、なんで助っ人の山本さんが私よりも年上何だよ？あの人今いくつ？」
苑自「確か７０は越えてるはずです。」
培句「なんで、分かってて７０の爺さん呼ぶんだよ。あれか、プロの２軍とかって話も元選手って事か。」
苑自「いえ、現役ですか。」
培句「えっ、ちょっと待てよ。あの爺さん今も野球やってるの？」
苑自「まあ、そういう事になりますね。」
培句「足プルプルしてるのに？」
苑自「あれじゃないですか。野球のときだけ人格変わるんじゃないですか？」
アナウンス「両チームは、グラウンドに集合してください。」
培句「まあ、とにもかくにも始めるぞ。」
第１回表
バッター　向課長

アナウンス「ピッチャー、振りかぶって投げました。」
カッキーン
宇多「あっ、やばい大きい。」
バサバサバサ

宇多「あっ、小森さんが飛んだ。って、いうかあの人（？）飛べるんだ。」
佐藤「でも、取りましたよ。」
小森「ウエニイクト、ニッコウガツヨイノワスレテタ・・・」
宇多「あっ、降りてきた・・・っていうか落ちてきた。」
培句「おい、大丈夫か？かなり、衰弱してるけど。」
小森「ダイジョウブデス。」
培句「いや、でも足プルプルしてるぞ。」
山本「私と同じような人が1人増えましたな。」
培句「うるせえよ、じじいいい。何、あんたちょっと座って休んでるんだよ。」
山本「パワハラですか？」
培句「別にあんたの上司じゃないよ。」
山本「パ～ワ～ハ～ラ～♪」
培句「何だよ、その歌。」
苑自「私が作ったパワハラ音頭ですよ。」
培句「しょうもない歌作ってるんじゃないよ。」
苑自「でも、そこそこ儲かってますよ。」
その後二回裏
審判「フォアボール。」
向社長「ちょっと、田向君、なんでもうちょっと勢いよく投げないんの？」
田向「なんか、あの人に近づくと急にボールが失速するんですよ。」
宇多「今、平野さんが塁に出たからえーと、次は山本さんですね。」
培句「本当に大丈夫か？」
アナウンス「ピッチャー振りかぶって投げました。」
ガンッ
向社長「田向君、何当ててるの。リアルデッドボールになっちゃうでしょう。」
宇多「爺さん、大丈夫か？」

山本「あっはっはっは。」
宇多「どうした？打ち所が悪かったか？」
培句「あっ、次は私の番か。」
アナウンス「ピッチャー振りかぶって・・・あーっ盗塁です。しかし、田向選手も3塁にボールを投げました。」
宇多「あっ、駄目だ。間に合わない。」
平野「・・・・・。」
パンッ
皆「えっ？」
佐藤「なんでボールが割れたんですか？」
苑自「平野さんがなんか妖術みたい事をしたんじゃないですか？」
宇多「そんな事あるのか？」
苑自「いや、あの人ならもしや・・・」
宇多「それはそうと、2人ともホームに戻って来たな。相手のサードがあたふたしてるけど・・・」
アナウンス「さて培句社長三振でチェンジ、部下は2点も入れたのに、社長は三振、社長のくせに。」
培句「なんか腹立つな。あのアナウンス。」

その後　9回終了
向課長「見事に負けましたね。」
向社長「当たり前だよ、勝てるわけないじゃないか。あっちの投げたボールはなんか消えたり、出てきたりしてさ。こっちのボールは途中で落っこちちゃうしさ。」
培句「じゃあ、この賞金何に使うよ？」
宇多「何って、そこらじゅうに借金返すのに、使うしかないでしょう。」
結局、今回も借金は返ったが向ビルにテレビは返って来なかった。

2階裏あっ間違えた2回裏（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
なんかいいことないかな。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

茄茂泣ラブストーリー（前書き）

3月です、春です。茄茂泣町にも春が来ました。

茄茂泣ラブストーリー

プルルルル　ガチャッ培句「もしもし、ああ鎗栗か。どうした？うん、えっ？」

１０分後

培句「と、いうわけで。」

苑自「なるほど、じゃあ、前に佐藤さんとお見合いした、鎗栗さんのデパートで働いている、あの佐藤茶を飲んで微動だにしなかった奇跡の人がまた佐藤さんに会いたがっていると。」

宇多「でも、あの時に佐藤さんはお断りしてたんじゃないですか？」

培句「でもね、相手側がもう、えらく気に入っちゃってもう１度でいいから、会わせてくれって。」

宇多「だったら、佐藤さんに直接言えばいいじゃないですか。なんで私達のところに来るんです？」

培句「いや、でもさ。１度断ったっていうのを、また蒸し返すっていうのも、なんだしさ。なかなか、言い辛くてね。」

宇多「だったら、相手側に訳言って断ればいいじゃないですか。」

培句「でも、こんな小さな会社だよ。社長と言えば親も同然社員と言えば子も同然だよ。」

苑自「いやですよ。こんな親。」

培句「佐藤さんは、まあ器量もなかなかだし、仕事も出来るし、気も効くよ。でも、そのあまりあるものを打ち消す佐藤茶があるんだよ。」

宇多「でも、完璧すぎるのも息が詰まるから、１つぐらい欠点があった方がいいって人もいますよ。」

培句「あれは、もうそんなレベルじゃないだろ。でも、あの人はそこを完全にカバーした唯一無二の人かもしれないだろ。さっきも言った通り娘同然の人が１生独身っていうのも不憫だから、どうにかしたいんだよ。」

宇多「そうですよね、本人は結婚したがってますもんね。」
苑自「で、なんで私達にそれを言うんですか？」
培句「いや、何かいい知恵を貸してくれないかと思ってさ。ほら、三人寄れば文殊の知恵っていうし。」
苑自「うちの会社の場合、文殊っていうよりもんじゃですよね、その心は上に行けばいくほどグチャグチャです。」
培句「上って私達の事か？」
苑自「まあ、そういうことになりますね。」
培句「そんな事どうでもいいから、なんか考えろよ。」
宇多「惚れ薬とか、作れないの？苑自君。」
苑自「作ってもいいですけど、これは依頼ですからまあ、仕事ですよね。」
培句「まあな。」
苑自「じゃあ、会社から経費が出るんですよね。」
培句「まあ、しょうがないな。」
苑自「じゃあ、ざっと・・・こんなところになります。」
培句「・・・・ほかの手を考えよう。」
宇多「新しいものが作れないなら、今あるものでどうにかするしかないですね。」
苑自「何でいつの間にか、全面的に私に頼む様になってるんですか？」
培句「とりあえず、研究室の中を探ってみよう。」
研究室
苑自「どうぞ。」
培句「この中から、使えそうなものを探すのか。」
宇多「これ、なんか見覚えあるな。」
苑自「その薬、あれですよ。嘘がつけなくなる薬です。7年前に作った。」
培句「なつかしいな。これが確か、感電する雪を降らす機械で、こっちがつけたら浮き上がるベルトだ。」

宇多「なんだこれ？」
苑自「これは、あれですね。『強力電磁石』ですね。」
宇多「これは使えそうにないな。」
培句「ちょっと待ってくれ、電話がかかってきた。もしもし、えっ、うん。まあ、いいけど。」
宇多「どうしたんですか？」
培句「いや、鎗栗が相談するために、来るって言ってるんだよ。」
苑自「そうですか、じゃあ私達はこれ片付けてますんで。」
宇多「じゃあ、私も運ぶの手伝うよ。」
１０分後
鎗栗「兄さーん。」
培句「ああ、来たか。」

苑自「部長、これ運ぶの手伝ってください。」
宇多「それ、雪降らすやつか？」
苑自「ええ、これ以外と重いんですよ。」
宇多「どれどれ、ヨイショ…結構重いな。」
苑自「車輪が動くと楽なんですけどね。」
宇多「一回おろすか。」
ドンッ
苑自「ちょっと、強く置きすぎですよ。」
ウィィーン
宇多「あれ？なんかこれ動いてない？」
苑自「さっきので、スイッチが入ったみたいです。」
宇多「確か、これ空気中の水分で雪だるまを作るんだよな。」
苑自「ええ。」
宇多「なんか、天井の方で固まりだしてるんだけど。」
苑自「もうすぐで、雷と同じで落ちてきますよ。」
ドンッ　ビリビリ
宇多・苑自「ぎゃああ。」

その時、室内に雷が落ちた事で『強力電磁石』のスイッチが入った。
その頃　応接間
培句「えーと、あなたが内木〔うちき〕さんですか？どうも、あの時はろくに挨拶も出来ずに大変失礼しました。今、名刺を・・・（心の声）あっ、これさっきの薬だ。いいや、この皿の中にあけちゃえすいません、今、名刺をきらしてました。」
この頃、『強力電磁石』の効果で苑自主任の研究室に鉄の塊が迫っていた。
佐藤「お茶をどうぞ。」
鎗栗「わざわざ、すいません。
（心の声）これが、噂の・・・」
培句「（心の声）なんか、変な音がするな。
ちょっと、失礼。」
ゴオォォ
培句「うわあああ。」
ドンッ
培句「うーん…」

佐藤「社長、遅いですね。」
鑓栗「本当にね。」
ゴクッ
鎗栗「（心の声）しまった、何の気なしに飲んじゃった。ああ、体が焼けるうう。」
うわあああああ」
佐藤「鎗栗さん？どうしょう、外に飛び出しちゃった。」
内木「・・・。」
佐藤「（心の声）ああ、2人にされちゃった。なんか、ないかな？
あっ、お皿の上になんかある。
あの、よかったらこれ召し上がってください。」
パクッ

内木「ペラペラペラペラ」
佐藤「えっ、いやこちらこそ、お願いします。」
めでたしめでたし

茄茂泣ラブストーリー（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

古今東西浦島太郎（前書き）

毎度お馴染み昔話シリーズ今回は浦島太郎です。

古今東西浦島太郎

子ども達「やーい、やーい。」
浦島太郎「これこれ、子ども達どうして亀をいじめるんだ。」
子どもA「だって、こいつ動くのすげー遅いんだぜ。」
浦島「なるほど。」
子どもB「えっ？」
浦島「この世の中が目まぐるしく変わる時代にあるまじき行動だ。」
子どもC「おじさん？」
浦島「おや、いいところに出刃包丁があった。これで根性を叩き直してやる。子どもが見るもんじゃねえ、あっちいってろ。」
子ども達「ウワーン、このおじさんおかしいよおお。」
亀「あっ、逃げた。あの、助けて頂きどうも・・・」
浦島「今日は亀鍋だな。」
亀「えっ、いやちょって待ってくださいよ。助けてくれたんじゃないんですか？」
浦島「助けたよ。あのままだと身が傷むから、血なまぐさくなっていけねえ。」
亀「いや、ちょって待ってくださいよ。野暮ですよ。」
浦島「野暮でいいよ。近頃、魚ばかりだったから飽きてたんだよ。それに、亀鍋好物なんだよ。」
亀「じゃあ、分かりました。代わりといっちゃなんですが、竜宮城にご招待しましょう。」
浦島「竜宮城ってなんだ？」
亀「海の中にある城で、そこで最高のおもてなしをさせて頂きます。」
浦島「怪しい。」
亀「はい？」
浦島「お前みたいな亀1匹助けただけで、そんなところに行ける訳

がない。さては、お前俺を海の中に引きずりこんで窒息死させる気だな。」
亀「ギクッ、そんなわけないじゃないですか。」
浦島「今、ギクッって言ったろ。そんな分かりやすいギクッを聞いて生身でいくわけにはいかない。ちょっと、待ってろ、酸素ボンベ持ってくるから。」
亀「（心の声）チャンス、このすきに。」
1分後
浦島「待たせたな。」
亀「（心の声）畜生、なんで亀ってのはこんなに逃げるのが遅いんだ。これでも、若い頃はうさぎに勝てたのに。」
浦島「じゃあ、出発だ。分かってると思うが嘘だったら亀鍋だからな。」
亀「重っ、酸素ボンベってこんなに重いんですか？」
浦島「つべこべ、言わずに早く入れよ。」
海中
亀「（心の声）参ったな、竜宮城は本当にあるけど行ったところで俺1人助けてもらったがために、もてなしてくれるわけないし・・・」
浦島「おい、あれじゃないのか？」
亀「えっ、あっ、そうです。では、先に行って話をつけてきますんで、そこで待っててください。ただいま戻りました。」
乙姫「こら、亀。あんた仕事仕事さぼって何やってたの？」
亀「実はかくかくしかじかで。」
乙姫「何？助けたからもてなせって？」
亀「ええ。」
乙姫「いやよ。」
亀「えっ？」
乙姫「なんであんたの手落ちで、みんなが損をしなきゃいけないのさ、わたしゃやだよ。」

亀「でも、なんかしないと私が亀鍋にされちゃうんですよ。」
乙姫「なればいいじゃないの。」
亀「なればいいって、あんた人事だと思って。」
乙姫「元はといえばあんたが仕事さぼって、地上に出てたからこうなったんでしょ。亀鍋にでもなんでもなりな。」
亀「そんな生け贄みたいな・・・分かりましたよ、でも私1人だけ鍋にされるのもしゃくだから、皆さん道連れになってもらうよ。」
乙姫「どうするっての？」
亀「玉手箱のふたあけるよ。」
乙姫「あんた、そんな事したら城中に老化ガスが…分かったわよ、そのかわりあんたの給料から費用は引いとくからね。」
浦島「おい、まだか？」
亀「あっ、浦島さん。ちょうど今、話がついたところです。どうぞこちらへ。」
客間
乙姫「私〜わたくし〜、ここの責任者の、乙姫です。」
浦島「あんたが責任者？」
乙姫「何か御用がありましたら、何なりとお申し付けください。」
浦島「そうかい？じゃあ、早速だけどなんか食べ物をもらえるかい？」
乙姫「どのような物がお好みで・・・。」
浦島「だから亀鍋だって。」
亀「浦島さん！」
浦島「駄目なりゃ、ピザでいいよ。」
乙姫「しかし、ここにはピザを焼く設備がないのですが。」
浦島「いいよ、出前取るから。」
乙姫「いや、出前と申しましても、ここは海の底ですし。」
浦島「いいんだよ、今はそういうサービスが行き届いてるんだから。
後、酒も頼んどいて。」
31分後

配達員「ちわっー。ピザキャップです。」
乙姫「遅いわよ、３０分過ぎてるじゃないの。無料（ただ）にしなさいよ。」
配達員「いや、僕バイトなんで無理ですよ。」
乙姫「でも、あんたが早く来なかったせいで、寿司職人を呼ぶって脅された亀が２１分間ずっとどじょうすくいさせられて、立てなくなったのよ。これでもまけないっていうの？」
配達員「いや、そんな事言われても・・・。」
１時間後
浦島「あっはっはっは、ちょっと、ちょっと。」
亀「どうしました？」
浦島「もう、腹もいっぱいになったし、酔いも回ってきたから、帰ろうと思うんだけど。」
亀「えっ、ああ、お帰りになるんですか？」
浦島「でよう、なんか土産を持って行きたいから・・・おっ、あの箱もらっていっていいかい？」
亀「えっ、あれですか・・・？あっ、どうぞどうぞ構いませんよ。」
浦島「そうか、じゃあ荷物だけまとめさせてくれ。」
亀「分かりました、では準備ができたら、お呼びください。」

乙姫「帰ったの？」
亀「ええ。」
乙姫「まあ、散々散らかしていきやがって。あれ、酸素ボンベ置いていってる。誰か、中身抜いてから捨ててておきな。」
亀「あれ？」
乙姫「どうしたの？」
亀「なんか、あそこにかけてあった高い掛け軸がないんですけど。」
乙姫「えっ？あっ、本当だ。金目のものがあらかた持ってかれている。おい、あの男なんか帰り際持ってなかったかい？」
亀「そういえば、玉手箱を。」

乙姫「あの中に、入れてもっていったんだ。」
亀「でも、おかしいですね。あれをあけたら、老化ガスが出るのになんで中に物を入れられたんでしょうね？」
乙姫「なにかに詰め替えたのか・・・はっ、そういえばさっきの酸素ボンベは？」
亀「さっき、誰かがその辺で中身を出してましたけど。」
プシューーー

古今東西浦島太郎（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
作者は無事です。今は、動物愛護団体に見つからないかが心配です。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

まともじゃない（前書き）

ある夜、出張先で仕事を終えた培句社長は舐泣町にいた。

まともじゃない

培句「やれやれ、やっとここまで来たよ。えーと、この店で『ものすごく喉が乾くキャンディ』を買って来てくれって言ってたな。」

誘拐犯兄「おい、あれにするぞ。」

誘拐犯弟「あれ？あの、今キャンディ買ってた奴？」

兄「そうだよ、見たところどこぞの社長らしい。こいつは期待出来るぞ。」

弟「あっ、そう。じゃあ、俺、声かけてくるよ。」

弟「ちょっと、すいません。」

培句「はい？どうかなさいましたか？」

弟「今、外であなたを呼んでる方がいるんですけど、なんだかご家族が倒れたとか。」

培句「えっ？」

弟「とにかく、外に車を停めてますから、急いでください。」

培句「分かりました。」

弟「さあさあ、こちらです。乗ってください。」

兄「どうも、こんばんは。」

弟「では、出発。」

４０分後

兄「やけに静かだな。」

弟「あっ、寝てる。」

兄「そうか、なら今のうちに縛っておけ。」

弟「ヨイショっと、あれまだ寝てる。よく知らない奴の車でここまで熟睡できるな。」

兄「しかし、あんな手に引っかかる奴まだいたんだな。」

弟「本当だよ、今頃子どもでも引っかからないよ。」
兄「そろそろ起こしな。」
弟「おっさん、着いたよ。」
培句「うーん、りんごジュースだと思って飲んだら、麦茶だったときのあのまずく感じる感覚は何だろう？」
弟「変わった寝ぼけ方するやつだな。おっさん、着いたよ。」
培句「うん？着いたの？あれ、何この縄？なんか知らない所だな。」
兄　「いいか？あんたは誘拐されたんだ。」
培句「えっ？」
弟「今、俺らのアジトに着いたんだ。」
培句「またまた、ご冗談を・・・」
兄「嘘じゃねえよ。疑うんなら中に入ってみろよ。」
培句「いや、入ってみろって言われても縛られて動けないんだよ。」
弟「どうしろって言うんだよ。」
培句「運んでくれ。」
兄「まったく、手間のかかるやつだな。」
アジト内
培句「なるほど、映画とかでみたまんまだ。」
兄「分かったか？」
培句「分かったけど、よくまあこんな手間のかかることするね。」
弟「元置き引きだったけど、前に爆弾を持って来たことがあって、危なっかしいから商売替えしたんだよ。」
培句「はあ、色々あったんだねえ。」
兄「じゃあ、家の電話番号教えな。」
培句「携帯買ったとき人にあげちゃった。」
兄「じゃあ、知り合いの携帯の番号は？」培句「登録されてるから、いちいち覚えてない。」
兄「じゃあ、携帯は？」
培句「日帰りの予定だったから置いて来ちゃった。」
兄「おっさん、仕事何やってんの？」

培句「会社の社長だよ。」
兄「じゃあ、会社の電話番号は？」
培句「教えてもいいけど、今、電気止められてるからつながらないよ。」
弟「電気代払ってないの？」
培句「いや、払えないの。」
弟「何だよ、儲けてそうだから誘拐したのに。」
培句「儲かってねえよおおお。」
兄「なんだ、このおっさん突然？」
培句「ここんところ、うちの役立たず開発部がろくなもの作らねえから、赤字なんだよおおお。お陰で、また銀行に頭下げなきゃいけないんだよおおお。ああ、腹立つなあああ。」
弟「まあまあ、落ち着いて。」
培句「ふうーっ、ふうーっ。」
兄「なんだ、金の話したら突然。」
弟「じゃあ、とりあえず会社の住所教えてくれ、手紙だすから。」
培句「ああああ。」
弟「あっ、駄目だ。会話出来ない。」
兄「うわーっ、飛びかかって来た。」
続く

まともじゃない（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
今回の震災で被災されたかたがたに心よりお見舞い申し上げます。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

犯罪史上最も得をしない犯罪（前書き）

前回、誘拐されたものの、野丸の経営状況の話をされた途端、覚醒してしまった。これから、この誘拐犯達はどうなってしまうのであろうか。トゥ　ビー　コンテニュードゥ・・・

あっ、今から始まるのか。

犯罪史上最も得をしない犯罪

兄「ああ、ひどい目にあった。」
弟「この怪我のひどさを見せられないところが、小説のつらいところだ。」
培句「うーん。」
兄「おい、気がついたぞ。」
培句「おや、どうしました、その怪我？漫画みたいに体中に包帯を巻いて、そこら中に青あざを作って。」
弟「どうしたって、あんたに・・・」
兄「いいよ、もう。」
弟「だって、兄貴。」
兄「いいんだよ、これ以上なんか言って飛びかかって来られたら、身がもたない。ところで、おっさんの会社の住所は？」
培句「えーと、茄茂泣町木連3丁目真田野｛まだの｝ビル一階有限会社野丸。」
兄「なるほど、おい手紙書いたか？」
弟「うん。」
兄「さっき、聞いた住所書いとけ。」
弟「こいつはなかなか名文だよ。」
兄「別に、脅迫状で名文書かなくていいんだよ。住所書いたか？」
弟「うん。」
兄「じゃあ、それポストに入れて来てくれ。俺は、見張ってるから。」
少し時が経って、有限会社野丸では
宇多「あれ、みんな何やってるの？」
佐藤「焼き芋ですよ。」
宇多「この、桜が咲いてる時期に、随分季節感の無いことやってるな。」

佐藤「処分する書類が沢山あったのと、スーパーで芋の特売やってたのが重なったんで、書類を燃やして焼き芋って事に。」
苑自「しかしまあ、本当に芋ってのはいいですね。」
宇多「どうした？急に語り出して。」
苑自「だって素晴らしいじゃないですか。腹に溜まるし、それでもって安く手にはいるし、焼けばうまいし。」
宇多「どうして、突然、戦時中みたいな了見になるんだよ。それに、どうでもいいけど、なんだか火が弱くないか？」
佐藤「もうちょっと、燃やしたいんですけどもう書類がなくて。」
郵便配達員「すいません、もしかしてあのビルの会社の方達ですか？」
宇多「ええ、そうですけど。」
郵便配達員「あの、これ印鑑かサインがいるんですけど。」
宇多「はいはい、これでいいですか？」
郵便配達員「はい、どうもありがとうございました。」
宇多「どれどれ、なんだこれ重いな。苑自君・・・、うわあああああ、何燃やしてるの？」
苑自「さっき来た手紙とかですよ。」
宇多「いや、そうじゃなくてなんで燃やしてるの？」
苑自「いいじゃないですか、どうせここに来るのは、請求書ぐらいなんですから。」
3日後　例のアジト
兄「来ないな。」
弟「来ないね。」
兄「なあ、あのおっさん本当に社長か？」
弟「知らないよ、兄貴が言ったんだよ。」
兄「でも、社長が誘拐されたの知ったら警察に電話ぐらいするだろ。こんな小さな町で、誘拐があったらニュースぐらいなるだろおお。」
弟「駄目だよ、大きな声だしちゃ。あのおっさんが覚醒しないように、食べたいだけ食べさせてるから、俺達ろくに食べてないんだか

ら。」
兄「でも、なんだかイライラしてきてしょうがねぇんだよ。なあ、おっさん。あんた、そんなに大切にされてないんじゃないか？」
弟「あ、兄貴そんな事言って覚醒したら・・・。」
兄「うるせえよ、イライラしてんだからなんか言うな。」
培句「（心の声）なんだ、この人達？覚醒？何、言ってるんだろう？だいたい、ひとつの会社の社長だよ、大切にされてない訳ない。仮に、会社の奴らが見捨てたところで、家族もいるわけだし、多分何らかの作戦で・・・。」
このとき、培句社長の記憶のスイッチが入った。
培句「（心の声）そういえば、妻はこの頃カルチャーセンターに夢中で、『あなたが居なくても大丈夫』が口癖だった気がする。弟の鑓栗は・・・、『俺も苦しいから兄さんに何かあっても、助けられないよ。』が口癖だった。子ども達はあてにならんし…でも、会社の連中は私が居なくなったら・・・。宇多君は・・・駄目だな。奥さんの実家が漬け物屋って言ってたから、そこを継ぐだろうし。苑自のバカは・・・。あいつ、腕だけは確かなんだよな。雇い先はいくらでもあるし、裏でなんかやってるらしいから、生活に困らないんだよな…佐藤さんは・・・多分、内木さんのところに嫁に行くから、食べていけるな。平野さんは・・・無理だな。あの人どうやって生きてるのかが分からないし…。あれ、もしかして私が居なくても誰も困らないんじゃ…ていうか、もし私が死にでもしたら保険金がいくらかあいつらにはいる訳だから、どっちかっていうと得・・・。あああああ。」
兄「うわあああ、また覚醒したあああ。」
弟「だからいったじゃん、だからいったじゃん。」
培句「冗談じゃねえよおおお。なんで、私が死んであいつらが得するんだよおおお。こうなりゃ、意地でも生き延びてやるからなああ。あああああ。」
弟「うわあああ、また飛びかかって来たあああ。」

１時間後
兄「怖かったよお、怖かったよお。」
弟「兄貴、このおっさん寝てるすきに送り返そうよ。」
兄「と、言うと？」
弟「前に手紙を送った時、住所が分かったから。寝てる間に会社に置いて来ちゃおう。」
兄「そうだな。」
その頃　野丸
宇多「うっぷ。」
苑自「部長、まだへばっちゃ駄目ですよ。」
宇多「後、何本だ？」
佐藤「買って来たのが１０本、宅配で届いたのが２５本、合計３５本です。」
宇多「まだ、そんなにあるのか。」
苑自「焼き芋もこれだけあると、憎いですね。もっと、手伝ってくれる人いないですかね？」
佐藤「そういえば、社長が食べてないんじゃないんですか？」
宇多「そういえばそうだな。苑自君、ちょっと呼んできて。」
苑自「さっき、社長室みたらいませんでしたよ。」
宇多「そう？どこか行くって言ってたっけ。」
苑自「知らないですよ、だいいち会ってないんで。」
佐藤「私もです。」
宇多「えっ、ちょっと待ってよ。じゃあ、最後にあったのいつ？」
苑自「出張の前の日です。」
佐藤「私もです。」
宇多「じゃあ、ここにいるみんな５日間、社長を見てないの？」
苑自「そういえば、気づかなかったですね。社長、影薄いし。」
宇多「・・・、さがせええええ！」
弟「兄貴、ここだよ。」

兄「そうか、じゃあ起きないように、そっと運べ。」
弟「ヨイショっと。ここのソファーに寝かしとこう。」
兄「あーあ、くたびれた。」
３０分後
宇多「社長、見つかった？」
苑自「いいえ。」
佐藤「私もです。」
宇多「本当にどこいっちゃんたんだろう？あれ？」
佐藤「どうしました？」
宇多「なんか、社長ソファーで寝てるんだけど。」
苑自「もしかして、ずっといたのに、私達が気づかなかっただけなんじゃ…」
宇多「いや、まさかそんな・・・。」
その後、この事件は培句社長の神隠しとして、語り継がれている。

犯罪史上最も得をしない犯罪（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

呪いのヴィディオ（前書き）

相変わらず仕事がなくて、御退屈な野丸の皆さん。一体、この会社は大丈夫なのだろうか。

呪いのヴィディオ

培句「ああ、暇だ。」
宇多「でも、いいじゃないですか。いつもみたいに、仕事がなくて、あくせくして暇なんじゃなくて、大きな仕事を終えた後で暇なんですから。」
培句「そうだけどさ。でも、なんか・・・。あっ、そうだ。苑自君、ビデオ借りてきて。」
苑自「分かりました。じゃあ、お金ください。」
培句「あいよ。ほら。」
苑自「せっせっせっ千円ですか？いつもは、小銭で百円きっかり渡すのに、せっ千円ですか？」
培句「おつりは返せよ。」
苑自「ちっ。」
２０分後
苑自「借りてきました。」
培句「何、借りてきた？」
苑自「なんか、分からないですけど、適当に借りてきました。」
培句「なになに・・・。怨・恨・霊・恐伝？」
佐藤「どうでもいいですけど、なんかすごくお札が貼られてるんですけど・・・。」
苑自「そういえば、借りる時に店員から『あーあ、借りちゃった。知ーらね。』って言ってたけど・・・。あっ、もしかして。」
宇多「どうした。」
苑自「もしかして、これ再生出来ないんじゃ…。」
宇多「なんでだよ。」
培句「てめぇ、ふざけるなよ。人の金で再生出来ない物借りやがって。」
宇多「いや、他にこだわる事あるでしょ。って、うわあああ、なん

で苑自君お札はがしてるの？」
苑自「だって、このまま入れたらビデオデッキ壊れるじゃないですか。」
ガチャン
宇多「でもって、なんで再生してるの？」苑自「良かったですね。社長、再生出来ますよ。」
宇多「いや、消してよ。あれ、電源が落ちない？あれ、プラグも抜いたのに？」
佐藤「なんか、井戸が移りましたよ。あっ、手がかかった。」
宇多「来ちゃうって、これ来ちゃうって。」
ピッ
宇多「あれ、苑自君何したの？」
苑自「いや、一時停止押したんですよ。」
佐藤「なんだか、手ぇ震えてません？あっ、落ちた。」
培句「まあ、あの状態でずっと止まってたら疲れるわな。」
宇多「ああ、また来た。」
苑自「あれ、今度は一時停止出来ない？」
宇多「ああああ、上がって来ちゃった。来ちゃうって、これ来ちゃうって。」
パッ
佐藤「なんかチャンネル変わりましたよ。」
培句「ああ、そういえば視聴予約してたんだ。」
宇多「何、予約してたんですか？」
培句「名作時代劇『煎餅清次』の押し込み強盗一件だよ。」
苑自「なんか、化け物が襲われてるんですけど。」

番頭「助けてくれえ。グワッ」
強盗団首領「金を探せ。１人も逃がすな。」

宇多「あっ、危ない。化け物だから死ぬとかの概念があるか分から

ないけど・・・。あっ、押し入れに隠れた。」
強盗団首領「証〜{あかし}〜を残すな。店に火を放て。」
メラメラ
パッ
苑自「あっ、また画面が変わった。」
培句「なんか、随分ボロボロになったな。あの化け物。」
宇多「来ちゃうって、これ来ちゃうって。」
苑自「部長、さっきからうるさいです。」
宇多「ああ、もうだめだ。」
平野「・・・・・！」
化け物「うっ」
プッッ
宇多「あれ？なんでテレビ消えたの？」
苑自「私は何もしてませんよ。」
佐藤「私もです。」
培句「私も。」
宇多「でも、なんで突然？」
向社長「あっ、いたいた。」
培句「おや、向さんどうしたんです？」
向社長「どうしたじゃないですよ。いい加減、テレビ返してくださいよ。」
培句「はいはい、でもこれちょっと・・・。」
向社長「何、ちょっと壊れてるのか？」
培句「それもちょっと、遠いですね。」
向社長「まあ、いいよ、少しぐらい障りがあったって。今、デジタルテレビのキャンペーンをやってて、古いアナログテレビを持って行くと、回収もしてくれてしかも、デジタルテレビが割引で買えるっていうから。」
培句「ああ、そうですか。その回収されたテレビはどうなるんです

か。」

向社長「さあな、スクラップにでもなるんじゃないか？」

こうして、呪いのビデオの伝説は消えちまったような。

呪いのヴィディオ（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

父であるということ（前書き）

毎度お馴染み苑自主任.
今回は、会社で見られない別の顔が見られるかも

父であるということ

苑自主任「えっ、参観日？」
苑自主任の妻　洋子　「そう、私その日に親戚のゴタゴタを収めに行かなきゃいけないから、あなた代わりに行ってきて。」
苑自主任「でも、確かその日って平日じゃなかったっけ？」
洋子「いいじゃないの、どうせあなたの会社仕事ないんだし、あってもあなた仕事しないでしょ。」
苑自主任「まあ、それもそうだな。」
参観日当日
先生「それでは、父兄の皆さんもお席におつきください。」
苑自主任「・・・・・・。」
培句社長「・・・・・。」
苑自主任「社長、なんでこんなところにいるんですか？」
培句社長「お前こそ。」
苑自主任「社長、そういえば告別式って言ってましたけど、誰か亡くなったんじゃなかったんですか？」
培句社長「それは・・・あれだよ…その、このあとにあるの夜８時ぐらいから。」
苑自「８時なら会社休まなくていいじゃないですか。誰が亡くなったんです？」
培句社長「それは・・・あれだよ…昔、よく面倒見てきた人が亡くなったから。」
苑自主任「嘘だ。社長は人の世話が出来るような、了見じゃない。」
培句社長「やかましいわ。だいたい、お前も兄弟の結婚式だって言ってたけど、お前よく考えたら一人っ子だろ。」
苑自主任「そうですよ。」
培句社長「そうですよじゃないよ。何、開き直ってるんだよ。」
苑自主任「でも、誰かさんみたいに今更白々しく言い訳するより、

こっちのほうが潔いと思います！ねっ、先生」
先生「えっ？」
培句社長「やかましいわ、普段ろくな仕事もしないくせに1人前の理屈いうな、と思います。ねっ、先生。」
先生「えっ、いや。」
苑自主任「そっちこそ、ろくに給料払わないで社長面するなってんだ。と思います。ねっ、先生。」
先生「いえ、あの」
母親A「ちょっと、あなた達。先生が迷惑してるじゃないの。いい加減にしなさいよ。」
培句社長「誰だ、あんた出し抜けに？」
母親A「誰だっていいでしょ。あなた達が迷惑だから注意しただけのことでしょ。」
苑自主任「さては、あんたが今世間で噂のモンスターペアレントって奴だな。」
母親A「なんでよ、私がモンスターだったら、あなた達狂戦士でしょ。」
苑自主任「じゃあ、何がモンスターだって言うんですかっ？」
母親A「なんで、ちょっと切れてんのよ。ほら、あそこにいるあの人、ああいう奴よ。」
苑自主任「ふっふっふっ、では社長、モンスター狩猟対決とでも洒落込みますか。」
培句社長「臨むところだ。」
こうして、2人に間違ったエンジンが入ったところで、次回に続く

父であるということ（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

VSモンスター（前書き）

前回、なんだか間違った方向にスイッチが入ってしまった、培句社長と、苑自主任。果たして茄茂泣幼稚園の命運やいかに。

VSモンスター

モンスター母A「ちょっと、先生うちの子は小学校受験を控えてるんだから、工作なんかよりドリルでもやらしてください。」
苑自主任「ふはは。あれが噂のモンスターか。よっ、待ってました。」
モンスター「ちょっと、何ですかあなた？いきなり笑い出して。」
苑自主任「まあまあ、奥さん。要はあなたの息子さんが小学生程度の頭になればいいんですね。」
モンスター「まあ、そういうことね。」
苑自主任「それなら・・・ヨイショ。これなんかいいんじゃないかと。」
モンスター「なんなのそれ？」
苑自主任「こいつから出る光線を浴びると、小学生低学年程度の頭になれるっていう、光線銃です。」
モンスター「って、事はうちの子にこれを浴びせれば・・・。」
苑自主任「まあ、そういうことですね。まあ、少しチャージに時間がかかるので待ってください。」
培句社長「待て、機械で抜け駆けは許さんぞ。」
ドンッ
苑自主任「うわっ。」
ビビビビビ
モンスター「ぎゃあああ。あはは、あはは。」
苑自主任「しまった、モンスターに光線が当たって小学生程度の知能になってしまった。」
培句社長「下がる方もありなの？」
苑自主任「あーあ、もう一回チャージしなきゃ、小学校受験に受からないや。」
先生「親の方ほったらかしですか？」

苑自主任「んな事言ってもしょうがないでしょう。これしばらく経たないと、戻らないんだから。まあ、逆に言うとしばらく経つと戻っちゃうんだけどね。」
培句社長「苑自君、君もうちょっと責任持って物を作ったらどうだ。」
先生「ちょっと、待ってくださいよ、苑自さんって事は髪子ちゃんのお父さんですか？」
苑自主任「ええ、そうですけど。」
先生「隣の教室ですよ。」
苑自「えっ、そうですか。失礼しました。」
先生「ちょっと、あの人どうするんですか。」
苑自主任「知らないよ、娘の隣のクラスの母親の事まで。」
隣の教室
母親B「見て、可愛らしいわね。」
母親C「本当、やっぱり子どもは今ぐらいが、一番可愛いわ。」
母親B「このまま、止まってくれたら一番いいのにね。」
母親C「本当。」
苑自「何かあったんですか？」
母親B「あっ、髪子ちゃんのお父さんですか？ほら、あそこのあれ。」
苑自　髪子「わたちね、おおきくなったら培句君とけっこんしてあげる！」
母親C「ねっ、羨ましいわ。あんなに可愛くて、うちのなんかこの頃生意気になって・・・」
苑自「冗談じゃない。」
母親B「えっ？」
培句社長「本当だよ。」
苑自主任「社長、何で居るんですか？」
培句社長「よく考えたら、うちの孫もこの教室だったよ。」
苑自主任「でも、私が社長の親戚になるなんて、本当に冗談じゃな

いですよ。」
培句社長「こっちだって、願い下げだよ。」
苑自主任「でも、うちの髪子が結婚適齢期になったら、社長はもうすっかりボケちゃって何がなんだか分からないじゃないですか。」
培句社長「なんだと、誰がボケ老人だ。」
母親C「まあまあ、子どもの言った事なんだからそんなにむきにならなくても・・・」
苑自主任「うるさいな。」
培句社長「部外者は口を出さないでもらおうか。」
母親C「いや、ちょっと。」
苑自主任「そうだ、さっきの光線銃を『ゲンジツハアマクナイ』レベルに合わせれば年をとって考え直させられる。よしっ。」
培句社長「何、うちの孫に照準を合わせてるんだ。自分のところの娘にやれよ。」
苑自主任「うちの髪子になんかあったらどうするんですか！」
培句社長「こっちだって、うちの孫がお前のおかしな発明の実験台にされてたまるか、ちょっと貸せ。」
苑自主任「ちょっ、離して。」
ビビビビビ
このとき、光線はうまい具合に鏡に反射して、隣の教室に向かったのであった。

モンスター息子「ぎゃあああ。先生、この幼稚園の教育方針には多大な問題があります。このままだと、小学校受験を控えている子供達にも大きな損失が・・・」
先生「もうやだ、この幼稚園・・・」

VSモンスター（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
なんだか、この頃ジブリがいいなって思う作者です。いつかあんな作品を書くのが私の夢です。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

頭取の最も最悪な1日（前書き）

毎度お馴染み、経営不振の有限会社野丸。社長室で培句社長と、男が向き合っていた。

頭取の最も最悪な1日

培句「いつもいつも、申し訳ございません。」
茄茂泣銀行　頭取「私が来たって事は・・・分かってますよね？」
培句「はい、ご拝借のナニの、その・・・返済を滞らせてしまって・・・随分経ってしまって・・・」
頭取「いや、口上はいいから返す物を返してください。」
培句「ただいま、用意出来てるのが、これだけありますので、どうぞ・・・」
頭取「これっぽかり返してもらってしょうがないけど、まあ今貰っとかないと、また貰えなくなりそうだから頂きますよ。」
培句「申し訳ありません。」
頭取「第一、客が来てるのにお茶のひとつ出ないというのは、どういう事ですか？」
培句「お茶、出してよろしいんですか？」
頭取「嫌、よそう。あーあ、まったくいつになったら借りた物をまともに返せるような会社になるのかね？」
ドカッ
ピピピピピピ　カチッ
頭取「なんだ、この虫みたいな機械？あれ、取れない？おい、手伝え。」
培句「どれどれ、あっ、本当に取れない。すいません、担当の者が帰ってきたらすぐに外させますので。」
頭取「いや、待ってられないね。こっちはあんたらと違って、忙しいんだ。じゃあ、次に来るまでに必ず用意しておくように。」
バタンッ
宇多「社長。」
培句「誰だ？宇多君か？まあ、入ってくれ。」
宇多「頭取は帰られましたか？」

培句「ああ。」
宇多「しかしまあ、あの頭取のイヤミも相変わらずですね。」
培句「本当に・・・あの、イヤミメガネめ。苑自君が今行っている契約がうまくいけば全て解決なんだが・・・。」
苑自「ただいま。」
培句「おや、帰って来た。お帰り。」
苑自「社長、やりましたよ。」
培句「『やりました』って事はつまり・・・。」
苑自「契約取って来ましたよ。」
培句「本当か？よくやった！」
宇多「でも珍しいな、お前が先方にわざわざ出向くなんて。いつも、私に押しつけて帰るのに。」
苑自「今回作ったのは、仕組みが複雑なんで技術者が直接行った方が早いですよ。」
宇多「そういえば、何作ったんだ？」
培句「そうだな、教えてくれ。」
苑自「えっ、社長覚えてないんですか？」
培句「へっ？」
苑自「昨日社長には説明したじゃないですか。」
培句「そうか・・・。頭取が来る事で頭がいっぱいで、まったく覚えてなかったな。」
苑自「まあ、いいですよ。今回の契約で、あのイヤミメガネデブもおいそれと口がきけなくなりますよ。えっと・・・、これです。」
培句「あれ？これ・・・。（心の声）」
苑自「これはある程度のエネルギーを持って、飛んでくる物体を引き寄せる機械。通称『標的アンテナ』です。」
宇多「何に使うんだ？」
苑自「例えば、なんかの事件で犯人が人質を盾に立てこもるとしますよね。そんなとき、これを犯人に取り付けておけば、人質に危害を与えず確実に犯人だけに攻撃が出来るんです。」

宇多「なるほど。」
培句「それ、沢山作ってあるのか？」
苑自「ええ。」
培句「さっき、社長室に落ちてたぞ。」
苑自「そうですか、どうりで一個足りないと思った・・・。それ、どうしました？」
培句「頭取にくっついたまま行っちゃったよ。」
苑自「えっ？」

所変わって　頭取視点頭取「まったく、どいつもこいつも・・・。んっ？子どもがキャッチボールしてる。まったく、こうやって遊んでばっかりいるやつが借りた金も返せないようになるんだ。」
ピピピピピ　ピコン　ピコン
ガンッ
頭取「グエッ」
子どもA「おじさん、大丈夫ですかあ。」
頭取「この、クソガキ。気を付けろ。」
ビュン
ピピピピピ　ピコン
ピコン
ガンッ
頭取「グエッ」
子どもA「おじさん、たびたび大丈夫？投げるの下手だね。今、受け取るよ。ありがとうございます。」
頭取「…おかしい。いくらなんでも向こうに投げたボールが、こっちに飛んでくる訳がない。もしかして、これのせいか・・・？」

所変わって　野丸
宇多「で、それをつけたままだと、頭取はどうなるんだ？」
苑自「そうですね…多分半径３０メートル範囲の飛んでくるものに

衝突しまくりますね。まあ、よっぽど動体視力がよければよけられないこともないでしょうけど。」
宇多「けっこう危ないじゃないか。」
苑自「そうですよ、それもさっき言ったような時に使う物だから、外すのに特殊な器具が必要で、時間が１５分かかるんです。」
宇多「じゃあ、早く教えて外さなきゃ。」
苑自「でも、連絡の取りようが無いじゃないですか。確か、頭取は携帯を持ってなかったんじゃ・・・。」
宇多「あっ、そうか。」
所変わって　茄茂泣茄茂泣町支店
頭取「ああ、まったく死ぬかと思った。」
銀行員Ａ「ですから、只今のお客様の経営状況では、お金をお貸しする事は出来ないんです。」
続く

頭取の最も最悪な1日（後書き）

ええ、今回の話は長いので。ここまでが前編となります。
古今気楽初めての人情話来週完結です。

頭取の最も最悪？な1日（前書き）

前回の続きです、ああ長かった。

頭取の最も最悪？な1日

頭取「んっ、どうしたんだ。」
銀行員B「また来てるんですよ。あの製薬会社が。」
製薬会社「お願いします。この通りです。今、研究中の薬が完成したら沢山の人が助かるんです。でも、それにはもう少しお金がいるんです。」
銀行員A「ですが、規則ですから。」
製薬会社「なにを？規則だあ？なんだまたイヤミメガネハゲデブの命令か？やい、こうやっていい大人が頭下げてるのに、一人ぐらい人間らしい奴がいて、考えてさえくれないとはどういう事だ！ああ、こうなったらヤケだ。こいつが目に入らねえか？」
銀行員A「なんですか、それは？」
製薬会社「劇薬だ。炭酸、塩酸、硫酸、オマイ酸と揃ってるんだ。こいつをここで投げるぞ。」
頭取「いかん（心の声）ちょっ、お客様少しお待ちください。ただいま、用意いたしますので。」
銀行員A「えっ、頭取よろしいんですか？」
頭取「いいんだよ。なんか言うとお前の首が飛ぶぞ。これ以上なんか飛んできてたまるか。さあ、どうぞお客様こちらにサインをお願いします。」
製薬会社「えっ、ああ・・・。本当にいいんですか？すみませんね。なんか催促したみたいで。実際大きな事言ったけどこのビンの中身ビタミンウォーターですから・・・。よし、これでいいですか？」
銀行員A「はい。」
製薬会社「じゃあ、必ず返しにきますから。じゃあねー。」
銀行員A「あっ、頭取どちらに行かれるんですか？」
頭取「ちょっと、気分転換に出かけてくる。」
ウィーン

頭取「冗談じゃないよ。銀行の中にいても、金をだまし取られるしさ・・・。早く野丸に行って取らせないと。」
所変わって　野丸
宇多「今、銀行に電話したらさっき出かけた所らしいです。」
培句「困ったな。なんで今頃携帯も持たないんだ。」
苑自「ご心配なく、頭取を見つけるアイディアなら思いつきました。」
宇多「どうするんだ？」
苑自「頭取が標的アンテナをつけているのなら、なにかを投げれば頭取のところに向かうので、場所が分かるという訳です。」
宇多「なるほど、じゃあなにか投げる物・・・。」
培句「これなんかどうだ？」
宇多「社員なに引っ張って来てるんですか？」
培句「そこに捨てられてた廃車だよ。」
宇多「いや、駄目ですよ。頭取死んじゃうじゃないですか。」
培句「いいんだよ。どうせ、このままでも十分危険だから、ばれないよ。」
宇多「情緒がもう・・・。苑自君もなんか言ってやってよ。」
苑自「社長、どの道そんな重い物引き寄せられませんよ。」
培句「なんだ、そうか・・・。」
苑自「ですから、これで我慢しましょう。」
宇多「なにそれ？」
苑自「ロケット花火ですよ。」
宇多「いや、それも十分危ないだろ。駄目だよ、外に向けちゃ。」
苑自「えっ？もう火つけちゃいましたよ。」
宇多「何やってるの。早く消せって。ああ、もう間に合わない。」
シュパン　シュパン
ピピピピピ　ピコン　ピコン
頭取「うわあああ。」
宇多「あっ、外から頭取の声が。」

苑自「じゃあ、行ってきます。」
宇多「動じない奴だねぇ。」

頭取「はあはあ、もうすぐ野丸だっていうのに、なんでまたロケット花火が・・・。」
苑自「頭取ぃぃ。」
頭取「あっ、お前は確か野丸の研究員。」
苑自「無事ですか？」
頭取「無事じゃないよ。満身創痍だよ。最後のロケット花火に関しては、よける時に転んだよ。これ、あれだろ。お前が作った奴のせいだろ。」
苑自「そうですよ。もう大丈夫ですよ。今外しますから。」
ピコン　ピコン
苑自・頭取「危ねっ。」
ガンッ
ピコン　ピコン
苑自・頭取「再び危ねっ。」
ガンッ
頭取「どうするんだよ。危なっかしくて、ゆっくり取れやしないぞ。」
苑自「それでは、あいつを使いましょう。」
ピッ
フォンフォン
頭取「なっ、なんか飛んできたぞ。」
苑自「あれは、私の作った小型飛行機ですよ。」
ドシンッ
頭取「でも、これ廃車になんか色々付けただけじゃないか？」
苑自「そうですよ。さっき、社長が投げようとしてたんで、珍しくまともな事言って、止めたんですよ。こいつではるか上空に行けば頭取に引き寄せられる物もないので、安全ですよ。」

頭取「なるほど。」
苑自「それじゃあ、行きますよ。」
上空　３０００メートル
頭取「さっ、寒。」
苑自「まあ、上空３０００メートルですからね。もうすぐ、取れますよ。
」頭取「ちょっ、なんか旅客機が来てるぞ。大丈夫か。」
苑自「大丈夫ですよ。あんな重い物引き寄せられませんよ。」
プルルルル
苑自「あっ、電話だ。ちょっと、待ってくださいね。もしもし？」
宇多「苑自君か？今どこにいる？」
苑自「茄茂泣町上空３０００メートルですよ。」
宇多「どうでもいいから、早く戻って来て。えらい事になっるから。
」
苑自「えっ？」

ラジオ「続報です、茄茂泣町上空に向かっている、小型隕石は大気圏で燃え尽きることはなく、依然として茄茂泣町中央部に向かっております。」

副機長「機長、駄目です。これ以上操縦桿が動きません。確実に衝突します。」
機長「マジで？うわ、もう、冗談じゃねえよ。絶対、墜落するじゃん。」

ラジオ「ただいま、続報が入りました。ええ、まあ簡潔に言いますとこのままだと隕石は旅客機に衝突して、墜落。また、墜落した旅客機がきっかけで大規模な火災が予想されます。皆、逃げてええ。」
プッ
苑自「だ、そうです。」

頭取「いやいやいや、超まずいじゃん。早く私たちもここから避難しないと・・・」
ピピピピピ　ピコン　ピコン
カクッ　グウオオオオ
頭取「あれっ？なんか、こっちに向かってない？」
苑自「そんなまさか・・・向かってますね。」
頭取「早く、何とかしろよ。もっと、スピード出せよ。」
苑自「もう、出ませんよ。」
頭取「なんで、もっとちゃんとしたの作らねえんだよおお。」
苑自「てめえが、金を貸さねえからだろおお。」
頭取「何、人の金頼ってんだよおお。ちょっと、貸せよ。変わるから。」
苑自「駄目ですよ、暴れちゃ。」
ボロッ
苑自「あああああ。」
頭取「落ちたああ、野丸の研究員が落ちたああ。名前覚えてなかったけど、あの末恐ろしい物作るやつが落ちたああ。」
苑自「ああああああ、どうしよおお。携帯とエアバッグだけ持って落ちたああ。あっ、待てよ。エアバッグで・・・」
フワッ
苑自「あっ、結構いける。」
ガンッ
国防庁長官「グエッ。」
苑自「あっ、どうも。ご無沙汰しております。」
国防庁長官「あっ、お前は数年前に軍事工場の機密情報をハッキングして、軽く騒ぎを起こした苑自じゃないか。」
苑自「まあ、過去のことじゃないですか。たいした騒ぎにもならなかったし。」
国防庁長官「結構、騒ぎになってたよ。で、なんで空から落ちてきたの？」

苑自「ええ、ちょっと訳ありで・・・で、何やってるの？」
国防庁長官「いや、あの隕石をミサイルで迎撃するんだよ。」
苑自「えっ？」
ピピピピピ　ピコン　ピコン
頭取「なんか、ミサイルも増えたああ。」

苑自「えっ、いいんですか？あれに、茄茂泣銀行の頭取が乗ってるんですよ。」
国防庁長官「エッ、まずいんだけど。あそこから、結構金借りてるのに・・・。」
苑自「あれっ、なんか傾いてない？」

頭取「なんか、落ちてるうう。」

苑自「あそこに、あるのなんでしたっけ？」
長官「確か、市民プールじゃなかったっけ？」
ドボンッ
ピピピピピ　ピコン　ピコン
ピッピッピ　プスン
ドンッ
頭取「あっ、なんか腕の機械が壊れた。ゴボオボボ。」

ラジオ「ええ、今回なぜだか奇跡的に隕石の衝突は避けられ、ミサイルで爆破されました。では、最新ニュースです。先程、長年研究が続けられてきた新薬が完成しました。これにより、途上国でまねんしていた・・・」

その後、頭取は数々の特集で取り上げられる。≪標的≫となっていた。

頭取の最も最悪？な1日（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
今回のパロディ落語は『五貫裁き』です。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

培句社長の人生リベンジ作戦（前書き）

ながらく無沙汰を致しました。これからも一生懸命精進させて頂きます。

培句社長の人生リベンジ作戦

社長室
培句「・・・・・。」
宇多「失礼します。あれ、社長何してるんですか？」
培句「ああ、部屋を整理していたら昔のアルバムが出てきたんで、懐かしくなってな。」
宇多「どれどれ、随分昔の奴ですね。多分、この会社に入る前ですね。」
培句「そうだな。君が入社する5年前だからな。」
宇多「あの頃、もう少しちゃんと就活していれば・・・。（小声）」
培句「なんか、言ったか？」
宇多「いえ、それより、この頃苑自の研究室が変なんですよ。」
培句「変なのは、いつもだろう。使ってる奴が変な奴なんだから。」
宇多「それはそうなんですけど、そういうのじゃなくて、なんか・・こう・・物音がするんですよ。」
培句「どんな？」
宇多「機械が動いたりするような、まるで仕事をしているみたいな音がするんですよ。」
培句「仕事？あいつがっ？何ヶ月ぶりだろうな。」
宇多「そうですね、かれこれ4ヶ月ぶりぐらいですね。」
培句「本当か。いやあ、この所仕事をしてないみたいだから、てっきり辞めちゃうんだと思ってた。さっそく、様子見に行ってこよう。」
研究室前
コンコン
宇多「苑自君～？」
培句「苑自～？」
宇多「返事がないですね。」

培句「でも、鍵開いてるぞ。」
宇多「入りますか。」
培句「そうするか。」
ガチャッ
苑自「あっ、入っちゃだ・・・」
培句「うわあああ。」
苑自「あーあ、だから入っちゃ駄目って言ったのに。間に合わなかったけど・・・」
宇多「なっ何が起こったんだ。」
苑自「あっ、部長駄目ですよ。勝手に入っちゃ。」
宇多「入っちゃ駄目って、返事がないのに鍵が開いてるし、第一そんな危険なことしてるんなら、何か書いて貼っておくとか・・・。」
苑自「だから、そこに『入室禁止』の札をかけてるじゃないですか。」
宇多「ドアの内側にかけても意味ないだろ。外から分かるようにしなきゃ。」
培句「うーん。何があったんだ？」
宇多「あっ、社長気がつきましたか。あれっ？」
培句「どっ、どうかしたのか？」
宇多「さっきのアルバムの写真と同じ顔になってる！」
苑自「と、いうことは成功だ。」　　宇多「苑自君、いったい何作ってたの？」
苑自「『ネンレノイド』っていう放射性物質です。」
宇多「ネンレノイド？何それ？」
苑自「この石から出る放射線を浴びると、細胞が変化して若返ったり老けたりするんです。」
宇多「すごいじゃないか。これが製品化できたら、億万長者だぞ。」
苑自「そうなんですけどね…」
宇多「あ～あ。また、何かあるのかよ。」
苑自「いや、大した事じゃないんですけどね、ただ、放射線が出る

のが調節できないんです。」
宇多「大した事あるよ。好きなときに使えないって事だろ。」
培句「おっ、おい2人とも。」
宇多「どっ、どうしました？」
培句「なんだか体に力がみなぎってたまらないんだ。ああ、もう我慢できない。契約取ってくる。」
バタンッ
苑自「行っちゃった。」
宇多「契約って、うちの会社に今いち押しの商品なんてないぞ。」
佐藤「あの～、さっき２０代ぐらいの若い男の人が平野さんを連れてどっか行っちゃったんですけど。」
宇多「ああ、あれ社長だよ。」
佐藤「えっ、どういうことですか？」
宇多「実はこれこれこういう訳で・・・。」
佐藤「なるほど、でもそれじゃあ役に立たないじゃないですか。」
宇多「そうなんだよなあ、どうする？」
苑自「しょうがないから、町外れの崖に捨てに行きますか。」
佐藤「でも、あそこって前に謎の爆発があったんじゃないんですか？」
苑自「まあ、町外れの崖だったら爆発ぐらいよくありますよ。」
宇多「いや、謎じゃない爆発でもそうないだろ。」
その頃、培句社長
培句「ですから、契約お願いします・・・お願いします・・・」
実業家「えっ？はあ、はい。分かりました。ここにサインすればいいんですか？」
培句「ありがとうございます。それでは、失礼します。」
バタンッ
秘書「社長。」
実業家「ああ。」
秘書「なぜ、あのような条件でご契約を？」

実業家「私だって、分かっているさ。しかし、あいつの顔を見て、しゃべりを聞いていると、体が金縛りにあって、気づいたら契約書に手が・・・」
秘書「しかし、いつもの社長ならあれぐらいの気迫で来ようが、なんなく追い返せるはずです。どこかお体が悪いのでは・・・。」
実業家「お前達の世代はもう知らないかもしれないが、あの顔を見たら、我々の世代は体から鳥肌が出るような言われがあるんだ。」
秘書「と、おっしゃいますと？」
実業家「私がこの会社を立ち上げる前、資金作りの為に、ある企業に勤めていた。」
秘書「存じております。」
実業家「そのとき、私のそうだな・・・２・３才下の後輩で『契約の韋駄天』と呼ばれている男がいた。その名の通り、相手の訳の分からないうちに契約を決めてしまい、韋駄天のような速さで去って行くというまるで出来のよい空き巣のような奴だった。」
秘書「妙な表現ですが、おそらく適切なんでしょう。しかし、その話とさっきの男とどのような関係が？」
実業家「さっきの男がそいつにそっくりだったんだ。まるで、本人のようだった。」
秘書「お言葉ですが、その噂の本人と、さっきの男が同じ人間とは思えません。第一、社長の２・３才下なら５０代そこそこのはずです。さっきの男だったらどうみても２０代そこそこ・・・。」
実業家「私だってそう思うさ、でもあのテクニックに、顔までそっくりときてるんだ。動揺しないほうがおかしいだろ。現に、お前もあいつに圧倒されて、奥から出て来られなかっただろう。」
秘書「なるほど・・・。」

培句社長の人生リベンジ作戦（後書き）

ええ、長くなりましたので残りは後編となります。
次回は、野丸のメンバーがまた一騒動起こさせていただきます。

back to the old age（前書き）

前回の続きです。

back to the old age

その頃　宇多・苑自・佐藤
ガタンガタン
宇多「なんで、電車なんだよ。放射性物質を捨てにいくんだろ。」
苑自「大丈夫ですよ。アルミの箱に入れてますから。」
宇多「なんか、危なっかしいな、漏れたらどうすんだよ。」
苑自「大丈夫ですよ。こいつはアルミで十分防げますから。あっ、佐藤さんその飴1粒取ってもらえます？」
宇多「なんで放射性物質捨てに行くのに、お菓子持ってきてるんだよ。」
佐藤「これですか？あっ、これすごく喉が乾くやつですよね。」
苑自「そうなんですよ。ああ、やっぱり効くなあ。」
宇多「そんなことより、あっち見てみろよ。いい若い物が、優先席に座ってるぞ。」
佐藤「本当、あっ、前に立ってるおじいちゃん倒れちゃった。」

不良学生「いっていな、じじい何しやがん・・・」
ピカッ
不良学生「ぎゃあああ。ゴホッ、ゴホッ。じじい何しやがんだ。」
じじいA「ワシじゃないぞ。それに、あなたにじじいとは言われたくないな。」
不良学生「何、言ってんだ？あっ、これ本当に俺の顔か？いったいどうなってるんだ？」

宇多「おいいい。漏れてるじゃないか。（小声）」
苑自「大丈夫ですよ。こっそり次の駅で降りれば私たちだってバレませんよ。（小声）」
宇多「そういう問題じゃないよ。早くなんとかしろよ。（小声）」

苑自「無理ですよ。これは自然に戻るまで、待つしかないんですよ。それに部長も内心すっとしたんじゃないですか？天罰みたいなもんですよ。（小声）」
宇多「まあ、そうだけど・・・。あっ、着いちゃったよ。降りるか・・・。」

1時間後　野丸
培句「ただいま。」
宇多「あっ、社長帰って来た。」
培句「苑自、なんだかさっきから痙攣がして、汗が吹き出て、走馬灯が見えるんだが・・・」
苑自「ああ、それは体が元に戻る兆候ですよ。」
シュー
培句「あっ、戻った。」
宇多「それにしても、随分カバンに書類が・・・。あっ、全部、契約書だ。しかも、ものすごいこっちに都合がいい内容ばかり。」
培句「そこら中、走り回って契約取って来たんだ。グアッ、腰が。」
苑自「疲れとかは、そのまま引き継がれますからね。しばらく、動かない方がいいですよ。」
培句「あ痛たた。若けりゃ何でもうまくいくわけじゃないな。」

その夜　交番
お巡りさん「では、この老人が、お宅の息子さんだと言ってお宅に入ろうとすると。」
母親「ええ、追い返そうとしたんですが、息子の生徒手帳をもってたり、息子しか答えられない質問に答えられたので、とりあえずこちらに。」
お巡りさん「うーん。生徒手帳はどっかで拾ったとして、こう質問に答えられると、精神病院に入れるわけにも行かないし・・・。」
母親「智理さん、どうしましょう。」

お巡りさん「うーん、この人が若けりゃすべてうまくいくんだけどな・・・。」

ｂａｃｋ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｏｌｄ　ａｇｅ（後書き）

ええ、今回も無事書き終わりました。
感想お願いします、相変わらず作者が寂しがるので・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1952n/

古今東西気楽ノ進め

2011年11月27日16時52分発行